

生物質量の真実 第一卷
生物質量の全容

目次	1
表紙	2
目次	5
宇宙真相	6
霊界の真実は実話宇宙の真実	9
宇宙の真実	16
現在の宇宙情報はほとんどが未公開	22
誰も補充しない	25
配置	30
素材の吟味	34
量子の作用に過ぎない概念の所有	43
天然であるべきだ	44
生物質量とは何か	49
科学について	
相互作用について	

相互作用の真実	51
場力の構造	53
時空の構造	54
生物質量の自然発生の法則	58
自然は動植鉱物	62
天然は生物質量	65
人類の起源、生命の起源、文明の起源	69
生物質量の構成	72
生物質量について	75
完全完成確定性原理	76
脳と計算機	92
生物質量の単位	98
後記	101

宇宙真相

靈界の眞実は実話宇宙の眞実

靈界物語では大國彦は天王星より地球にくだる。二つある十二の神宝は金星より送られた。天之若宮の天之御三体の大神に天之浮舟で常世彦は談判に行く。靈界の天之若宮とは天であり天は宇宙であり大國彦は天王星よりくだりし神だから天之若宮も天王星と同じでどこかの天体にある都市のはず。しかも地球に極めて近く地球に来るのに必ず宇宙人が立ち寄るはずの天体だ。それは月面都市だ。靈界物語は実は宇宙物語なんだ。神道靈学のいう神集岳が天之若宮月面首都である。

物語では異星人でありながら容姿はまったく地球人と同じである。当然塩長彦や大國彦の配偶者は地球人の配偶者であるはずだ。なら異星人も我我の太陽系に住む者は地球人とまったく同じ人類になる。

神とは人とは何か。自分のいる天体から他之天体を見る場合、他之天体の住人が神なのだ。神とは他之天体の住人のことだから宇宙人である。宇宙にある天体の住人が神だから宇宙人といつても、やはり、同じで神のことだ。月つまり神集岳から地球を見るとやはり地球人は神に見えるのだ。人とは自分のいる天体の住人同士だ。他之天体の住人が神だ。物語の靈界すなわち宇宙の太古の真相は地球から月面に宇宙船で行ける。天王星からは地球に来れる。天王星には地球人と結婚できて子も出来る地球人と同じ人類がいる。月面には地球人と結婚もできて子も出来る人類がいる。金星には神がいるから神は人だから金星には人類がいる。

このことは太陽系の中の天体にたくさんの人類が住んでいることを示している。という

ことは物語の中の登場人物たちは異星人の存在は当たり前で宇宙人との交流は当たり前であつたということだ。数十万年前や三十五万年前や一万年前の段階で太陽系に人類がたぐさん住んでいたということだ。ということは太陽系に満遍なく人類は住んでいる。ここで物語はいう。日本に起きたことは世界に起きると。日本の良の金神王仁が現れたように戦後アメリカにも良の金神が現れた。ジョージ アダムスキーだ。

一万二千年前に全盛を極めたバラモン教を相手に活躍した三千彦の再来は、当然、型の仕組みから、北米を中心に世界中で活躍する。道彦の再来の王仁が、日本で霊界の哲学を物語で説いたから、三千彦の再来は北米で宇宙哲学を説くはずだ。

王仁が霊界物語で述べた太陽系の様子は、アダムスキーの宇宙哲学と同じである。物語では十二という数が繰り返して出てくる。物語では、十二の八尋殿に統治されていた。十二の八尋殿は宇宙の写しだから、十二の八尋殿に対応するのは十二の天体しかない。それは太陽系が十二の惑星で構成されているということだ。アダムスキーは太陽系は十二の惑星から出来ているという。しかもどの宇宙にもたぐさんの太陽系がありそれはどれも十二の惑星からなると言っている。

そしてその多くに人類が住んでいる。しかも我々の太陽系では総ての惑星に人類は住んでいて偉大な宇宙文明を築いていると言っている。地球だけが宇宙文明ネットワークに、加盟していない。そして宇宙船による惑星交流が行われていたのだから他の太陽系の天体とも宇宙交流がある。同様に銀河系の間や、さらに銀河団の間やさらに、超銀河団の間でも宇宙交流がある。

霊界物語に示された霊界は実は宇宙のことなのだ。霊界つまり神界、神霊界、天界とい

うのも、正神界、善神界の高原、天国、靈国、極楽浄土というのも、邪神界悪神界の、兇党界、煉獄、地獄というのもこれは実際には天体のことである。天使とか竜神とかいうのは彼らの宇宙船である。物語の天之鳥船天之浮舟は進んだ文明が持っているエアクラフトのことだ。物語で神が行う神法導術とは優れた科学力のことだ。

異星人の科学宗教哲学政治軍事経済は、八尋殿にヒヒイロカネ、靈と座を前提として、彼らは知性生命精神で感応する入出力装置を持ち三百兆年前の時空間を映し出す立体テレビや正直決済や情報家電のスイッチの入り切りに使っている。

昔からコンタクトした地球人に宇宙移民の真相を繰り返し繰り返し説いてきた。異星人は「我々の宇宙文明は全宇宙規模で構成され超銀河団航行用超光速宇宙母船が運航している。宇宙にある天体の基本は皆、同じで恒星が一つに惑星が十二ある。惑星の四つ目ごとに小惑星帯がある。多くの惑星にはたくさん人類が住んでいる。私達は太古から文明を築きネットワークを組んでいる。私達は居住可能な惑星を見つけると有志を募り移住をしてきた」と彼らはいう。

宇宙人は「我々は宇宙の法則を研究し今の文明を築いた。これは地球人にも出来ることだ。何故なら、我々も始めは地球人のように理想の新天地を開かんとする気高い移民から始まった。やがて現在の地球のように対立も起きた。その分裂も激しいほど戦乱を清める立派な知識を正しく使う正しい方法の構築のための試行錯誤に過ぎないと皆が気づくからだ」と彼らはいう。

今から二百三十万年前地球に最初に移住した人類が時照愛人である。ところが地球はまだ若く活発に活動していたので環境が不安定であつた。そこで時照愛人の多くは月に移住

して神集岳しんしゅうがくといわれるようになる。一部は地球に残り国祖たちの三五教の勢力になる。
天之若宮あめのわかみや月面都市げつめんとしを治める天之御三體てんのごさんたいの大神も元は地球から移住したのだ。地球は月の親星に当たる。天之御三體の大神と言えども、月の親星に当たる地球の主宰神がその祖神にあたる。その祖神は地球の主催者である国祖常立命なのだ。それで物語にはウラル彦が天之若宮に談判にいったくだりに、国祖が天之御三體の大神の祖神であると書かれているのだ。

神集岳より地球のほうが先に殖民が開始されたのだから神集岳の天之御三體の大神より国祖のほうが格式が高い。しかし環境が安定していなかったために宇宙船に避難するほどの大天災が何度もあり、環境が安定していた神集岳のほうが開発が早く進み、地球はこの太陽系で最も早く殖民が開始された惑星の一つでありながら、三十五万年前には最も未開な惑星になつてしまった。

宇宙の真実

現在地球は靈界物語のいう兇党界とアダムスキーのいうスペーススपीポールの宇宙からの脅威にさらされている。兇党界とは時空間病原体の妖幻坊である。スペーススピーポールとは神集岳の太陽系宇宙連合異星人ネットワークである。日本や各国の別室や石屋はそのことを知っている。人類が最初に地球に殖民を開始してからすでに二百三十万の歳月が流れた。いよいよ地球が完成する時が来た。この二つの脅威から現代を考えると靈界物語が見えてくる。

これは現代の地球人は地球を変えてしまうほどのパワーを持った。しかしそれは正しい方向にも誤った方向にも使える。正しい方向は高原だが誤れば兇党界だ。現在の地球は時空間病原体が溢れ返っている。時空間ナチュラルキラー細胞は衰弱している。異星人は地球人に、時空間を病気にするような行動はやめなさい時空間を健康にするものを作りなさいという。それはどうやって作るのか。異星人は「我我は宇宙の法則を研究し今の文明を築いた。これは地球人にも出来ることだ」と彼らはいう。

アルコールでデオキシリボ核酸をある程度、壊した種子をパイウオーターで発芽させると発芽する確率が高まる実験の成功は生命現象が時空間まで遡る可能性があることを証明した。檜崎皐月たちが証明したイヤシロチが健全な創造性や芸術美を磨きケカレチが人間を粗暴にすることは、知性生命精神が時空間と相互作用し知性生命精神の本質が時空間まで遡ることを証明した。

異星人は「その法則とは時空間の研究だ。このことは地球人の間でも研究されている。宇宙の起源を考えたとき無から始まり素粒子が出来て物体が出来た。無とは時空間の起源のことだから知性生命精神物体の起源は無まで遡る。かつて地球で起きたことに思いをめぐらし考えてみたまえ。地球人は沢山の警告を受けとってきたではないか。そろそろその警告を真剣に受け止めたらいかがかね。地球人が警告に対する明確な態度が取れないのは一言で言えば地球人が言葉の問題を解決できないからだ。

地球人の相互理解に対する認識が貧弱すぎるのが原因だ。宇宙に実在するあらゆるすべては時空間の原型により成立する。時空間の決済を通せば異なつた民族宗教文化風俗間でも相互理解が可能だ。言葉も行動も異星どうしで異なるがお互いに理解しあえる。地球人

は宇宙に関する情報が制限されていて空想の宇宙論がまかり通っている。テレビや映画や小説というようなメディアでお化け宇宙人が地球に侵略してきたり、人を襲うものが見受けられるが、これは決してありません。

私達は三千年前からの正しい宇宙の歴史を受け継いでいますが、スターウォーズが起きたことなどただの一度もありません。デスラーどこにいますか、白色彗星帝国どこにいますか、場所さえ教えてもらえば我が宇宙船で確かに行きます。クラーク ケント、どこにいますか、ルーク スカイウォーカーどこにいたんですか。どこにいたかを教えてください。ええ我が過去透視テレビでスキャンしますよ。お化け宇宙人を地球人が空想するのは、兇党界の脅威に脅えているからだ。我我は地球人の指導者たちにこのことを教えてきた。

エゴを使うと兇党界につけこまれると。かつて私達は地球にエゴの感覚に取りつかれた同胞を送り込んでエゴを経験させることにした。それは地球がエゴを学ぶ成長の段階にあるこの太陽系唯一の惑星だからだ。我我は同胞と一緒に地球人がエゴを学び乗り越えられるように手配してきた。同胞も地球人も兇党界の脅威やエゴを経験した」と言っている。地球人の良識ある人はこれに気づき活動してきた。とにかく、啓蒙活動だけでもしておかねばなるまい。

構造は、

高天原と、兇党界
化身言霊と、曲言事霊

イヤシロチと、ケカレチ

正しい言葉と、誤った言葉
正しい行動と、誤った行動
時空間ナチュラルキラー細胞と時空間病原体
時空間の原型を超越と時空間の原型に反逆
という対称構造に成っている。

これは
原型を超えたとき、最適化が起こる。
原型に近づくとき、誤差が消える。
原型から離れる時、誤差が起こる。
原型を超えたとき、進化が起こる。
原型に近づくとき、進歩が起こる。
原型から離れる時、退化が起こる。
成っている。

霊主体従から山河草木の再来の縄文の終焉から二千年たつた現在の三五教は、言霊を失う。三十五万年前の時代は宗教の時代であり一万二千年前は科学の時代だ。二代目常世彦は初代常世彦のウラル教と決別しバラモン教を開く。ウラル教は心霊の宗教であるから、二代目常世彦は心霊を否定し物質の教えを説き、宗教を否定し科学を創始した。

それは三五教が三五教を中心とした秩序の構築のために地球から時空の本質を隠蔽した歴史である。別室は心霊や物質が嘘であることを知っている。天祥地瑞や縄文時代、時空の背後に何があるかと問われれば皆バキュームと答えた。神霊界なんてものはないのが当

たり前^{まえ}。

死^しんだら、ほかの新たな肉^{にく}体^{たい}に生^なまれ変^かわる。生^うまれ変^かわる先^{さき}がほかの天^{てん}体^{たい}か、あるいは今^{いま}の惑^{わく}星^{せい}か、あるいは時^じ空^{くう}の背^{はい}後^ごの場^ばか、いずれかにいくのだ。あの世^よとこの世^よが、星^{ほし}から星^{ほし}へである。この時^じ空^{くう}を力^{りき}とすれば隠^{かく}世^せと顕^{けん}世^せは場^ばと力^{りき}である。

心^{しん}霊^{れい}界^{かい}や物^{ぶつ}質^{しつ}界^{かい}は霊^{れい}主^{しゅ}体^{たい}従^{じゅう}から山^{さん}河^か草^{そう}木^{もく}の時代^{じだい}に作^{つく}られた概念^{がいねん}だ。三^{さん}十^{じゅう}五^ご万^{まん}年^{ねん}前^{まえ}に心^{しん}霊^{れい}と宗教^{しゅうきやう}はウラル教^{うらるけう}により完成^{かんせい}した。一^{いち}万^{まん}二^に千^{せん}年^{ねん}前^{まえ}に物^{ぶつ}質^{しつ}と科学^{かがく}はバラモン教^{ばらもんけう}によつて完成^{かんせい}した。縄^{じよう}文^{もん}の終^{しゆう}焉^{えん}から千^{せん}年^{ねん}間^{かん}が像^{ざう}法^{ぽう}の世^よで心^{しん}霊^{れい}と宗教^{しゅうきやう}でありさらに千^{せん}年^{ねん}後^ご、心^{しん}霊^{れい}と宗教^{しゅうきやう}を否定^{ひてい}し物^{ぶつ}質^{しつ}の科学^{かがく}が勃^{ぼく}興^{きやう}し末^{まつ}法^{ぽう}の世^よとなる。

心^{しん}霊^{れい}というものは存在^{そんざい}しない。もともと、場^ばと力^{りき}と星^{ほし}から星^{ほし}へが常識^{じやうしき}であつたが、それが廢^{すた}れていく過程^{かうてい}で太^{たい}古^こからの英^{えい}知^ちが空^{くう}洞^{どう}化^かし觀^{かん}念^{ねん}化^かして出^で来^きたにすぎない。存在^{そんざい}の起^き源^{げん}を辿^{たど}るとき、無^むまで行^ゆき着^つく。だが地球^{ちきゅう}の科学^{かがく}は人^{じん}類^{るい}や文^{ぶん}明^{めい}の起^き源^{げん}が場^ばにあるとは考^{かん}えな

い。物^{ぶつ}質^{しつ}の起^き源^{げん}を無^むにあるとするが、無^むつまり場^ばに文^{ぶん}明^{めい}の起^き源^{げん}があるとは考^{かん}えない。なぜか、それは地球^{ちきゅう}独特^{どくとく}の問題^{もんだい}に起^き因^{いん}する。天^{てん}祥^{しやう}地^ち瑞^{ずい}や縄^{じよう}文^{もん}時代^{じだい}では心^{しん}霊^{れい}や物^{ぶつ}質^{しつ}はなくすべては場^ば力^{りき}と星^{ほし}の本^{ほん}質^{しつ}であつた。当然^{とうぜん}、人^{じん}類^{るい}や文^{ぶん}明^{めい}の起^き源^{げん}は場^ばにあり、三^{さん}千^{せん}年^{ねん}前^{まえ}に場^ばの我^{われ}我^{われ}の祖^そ先^{せん}がここの力^{りき}を作^{つく}つた。そして出^で来^きあがつたこの宇^{うち}宙^{ちゆう}に移^い民^{みん}して宇^{うち}宙^{ちゆう}文^{ぶん}明^{めい}ができた。そして地球^{ちきゅう}にも移^い民^{みん}が行^{おこな}われた。そのことは天^{てん}祥^{しやう}地^ち瑞^{ずい}や縄^{じよう}文^{もん}時代^{じだい}では当^あたり前^{まえ}であつた。

異^い星^{せい}人^{じん}との交^{こう}流^{りゅう}が当^あたり前^{まえ}であつた当^{とう}時^じ、前^{ぜん}世^せ界^{かい}の伝^{でん}承^{しやう}は当^あたり前^{まえ}で、ムーやアトランテイス、つまり古^こ史^し古^こ伝^{でん}の伝^{でん}承^{しやう}は当^あたり前^{まえ}である。ところが、それでは支^し配^{はい}ができな

時^じ空^{くう}を扱^{あつか}い自由^{じゆう}に生^なきる宇^{うち}宙^{ちゆう}文^{ぶん}明^{めい}では、支^し配^{はい}者^{しや}がいない。国^{こく}祖^そが支^し配^{はい}を確^か立^{りつ}するためには

宇宙文明を排除するしかないからだ。

そこで宇宙文明との交流が遮断された。宇宙文明共通の八尋殿やヒビロカネや霊や座という宇宙文明の利器は衰退した。そして管理のために宇宙文明の利器は改造されて体制に取り込まれていく。八尋殿は古墳、ヒビロカネは青銅器になり、霊や座を扱う技法は衰退し形式化し宗教的儀礼や宗教的儀式にくだっていく。

だがそれは無限を見ないからだ。天祥地瑞や縄文時代、宇宙移民の歴史が伝わっていたころ、人人は自然と語らい意気揚揚と生きていた。神仏を拝むようなことはない。幽冥界は、場力と星から星への宇宙移民者の生まれ変わりの歴史が失われ、それが形式化形骸化して心靈や宗教が出来て、後世の人が幽冥界を創作して出来たのだ。

だから言霊が觀念化し分らないのだ。実際に時空の背後に幽冥界があるのなら、どういふふうになつてゐる。宗教家は説明できないだろう。宮司に天照大神はいま何をしていいますかと、牧師にジーザスはいま何をしていいますかと、お坊さんに大日如来はいずこにいますかという質問はタブーだ。はっきり答えられない。不明瞭だ。神靈界に神がいて支配しているがごとき妄想は、役に立たない。実際には幽冥界に神はいない。靈界は存在しない。

神仏を拝むがごときは、場を見ていない。宇宙文明では礼拝施設がない。神を拝むごときが無い。天祥地瑞や縄文時代ではやはり神仏を拝んではいけない。礼拝施設を作り拝ませるがごときは、宇宙移民の歴史を失い、宗教家や権力者が自分の正当性を主張するためにさせている。第一、いくら拝んでも何の効能もないではないか。神仏がいるなら救つてくれそんなものだ。だが救いはない。

心霊や物質をいくら研究しても宇宙移民の無限からの歴史を見なければ四八音の響きの明瞭は見えない。時空間に鳴り響く四八音は人類の頭脳と共鳴し人類を真実に誘う。正しい認識は良い認識で良心が明瞭でないと正しい認識に達しない。宗教家や科学者が心霊や物質を説くから時空間との共鳴が起きない。科学者や宗教家が良心を発動し正しい認識を模索すると、心霊や物質を否定し場力と星の真実に目覚めるだろう。

宗教家は心霊を説き、科学者は物質を説く。しかし科学という枠組みを超え、宗教という枠組みを超え、宇宙文明に参加し森羅万象の構成要素として生きることが、人造組織の歯車をやめ本当の自分として行動することになる。だからそれを科学者や宗教家がしようとしても出来やしない。それをするとは別室に潰されるからだ。

別室は自分たちが規格を管理し、自分たちの歯車として生きることが民に強制する。場の本体と連動するのは別室だけ。ほかは認めない。当然宇宙文明との窓口を独占し、民が宇宙文明と気軽に付き合うことをよしとしない。別室自身は宗教家や科学者が場力と星の真相を見つけられないように宇宙移民者たちの実際の活動を隠蔽する。心霊や物質に慣らされ、受験勉強を強制される地球人に、もはや、考える能力はない。

三五教の元締めは別室が、一体なにをしてきたか。三十五万年もの間、我慢して我慢して、それ以外何もしていない。国祖の政策が言霊を潰したのだ。一厘の仕組みは、言霊の仕組みである。ならば三五教が自ら支配を破棄するしかない。霊主体従から山河草木まで三五教が、国祖以来自らの支配を樹立せんと、言霊を潰す権力組織を考案したのが過ちの始まりだ。民が森羅万象の歯車として場の原型と寸分違わぬ人生を送らせないようにしたのが過ちだ。

言霊の一厘の仕組みは三五教自身が天則に従うかどうかである。三五教に従うことが、天則遵守であり自由行動が天則違反とする三五教の政策が、過ちであると、日本の別室が公認するかどうかである。一厘の仕組みは、日本国が異星人の援助を公認するのかもしれない。公認するかどうかである。言霊はアザムであるがアザムの向こうに場力と星の真実をみいだすのか、どうかは国策にかかっている。言霊は紙に言霊と印刷してそれを言霊というのではない。時空の背後から来ていることが自覚できねば一厘の仕組みではない。

それは場力と異星の真実、つまり時空移民者と宇宙移民者たちの歴史の真実を公認するかである。古の賢者明哲が説いたのは、心靈界ではなく場力と星を自由に行き交う生まれ変わりのことであり、神とは場の住人のことであり、宇宙連合に参加する惑星の指導者のことであるという事実を認めるかである。

宇宙文明の援助でも、取り分け、地球から月に移住した時照愛人の本体の援助が手厚い三五教つまり日本が、宇宙文明の真相を公開すれば、それが型の仕組みになり、アメリカやロシアも宇宙文明の真相を公開する雛形にすることが出来る。一厘の仕組みとは言霊が無限から時空の背後を通じて我我に語りかけるザ スカイ コールであることが明瞭でなければならぬのだ。

現在の宇宙情報はほとんどが未公開

アメリカやロシアは宇宙開発で得た知識を独占し公開されているのは3パーセントにも満たないだろう。最も多い打ち上げられた人工衛星は軍事衛星で七割以上もある。しかし

極秘に統計にも乗らず打ち上げられたのも在るだろうから人工衛星のほとんどが軍事機密で公開されていない。

パツフル望遠鏡で撮影された写真は半導体センサーで見た遠くの天体だ。しかしそれはコンピュータで解析されきれいにクリーニングされた映像で実際にその天体にいつてみたのではない。この半導体センサーは観察する測定目的のみしか測定しないように出来ていて目標の一面しか捉えない。それ以外は測定できない。

たとえば人工衛星が地球の温度を測定すると高エネルギー粒子を測定し地表は数百度と観測し実際とはまったく違うデータを送信することもある。改良されやつと正確なデータを送信するようになる。天体の詳細は実際にそこへいつて見ないと分からない。パツフル望遠鏡での写真は実際にそこへいつて肉眼で見たときとはまったく違っているだろう。学者がしているのは、一万ピースのジグソーパズルの一ピースの一部を見て、もと絵を想像するがごときだ。これでは到底全体を把握できまい。関係者は、それは軍事機密だから、で、誰も何もいえないように統制されている。当然、真相を話せば軍事違反だ。国家に反逆したことになる。

それほど宇宙の真相は凄いのだ。アダムスキーを隠蔽しようとしているのはそれほどすごいからだ。長いこと真相は隠蔽されてきた。異星人と同等か、それ以上の超能力超科学を簡単に出来る生活技法の開発が終了しなければ公開される時代が来ない。

現在も過去も宇宙文明を取入れようと、アメリカやロシアやヨーロッパや中国も日本も躍起になってきた。だが上手くいかない。何故か、縄文系統の英知を滅ぼして太古からの宇宙文明を否定したからだ。今更、否定し潰した相手に悪うございましたと謝罪したくな

いからだ。

宇宙開発の結果、宇宙文明の存在が確かめられた。現行の政府の虚構があまり出されたからだ。日本の別室は三五教が諸行の悪を生み出したことを認めたくない。それが型になりアメリカもロシアも自分の悪行を棚上げする。日本が蓄積した真相を隠蔽するように、宇宙情報ほとんどが未公開である。日本の別室は日本史を隠蔽したうえに別室の都合のいいように改竄した。だからアメリカやロシアが宇宙情報を隠蔽し改竄する。

三五教が隠蔽し改竄した歴史を公開しなければアメリカもロシアも宇宙情報を公開しない。日本が場力と星の真相を公開し地球が宇宙移民で歴史が始まったと公開すれば、アメリカやロシアも真相を話す。日本が宇宙文明と交流し異星と往来すれば誰もが心霊や物質が場と力と星から星への真相を示す上での便宜上の概念に過ぎず、本来は宇宙の真相のこ

とだと思ふだろう。そうなれば強国もいつまでも、時代遅れの空想に浸っていたら取り残されると実感し、宇宙文明との交流を本格化させざるおえなくなる。

誰も補充しない

時空間はエントロピーが増大する熱力学の第二法則が成り立たないようになっている。自然界では熱力学の第二法則は通常成り立たない。人間が為さないう限らない。物質界では熱力学の第二法則が支配する。天然自然界を物質界と捉えるからエントロピーの増大で考える見方をする。物質界ではバキュームもストロンチウムもコンチニウムもアトムも生命

や意志をもつはずがない。そりやそうだ。それが物質だ。従って物質の運用は意志や生命を持たない方向に向かう。生命や意志が自然発生する研究をすることは、物質の研究を志す者にはご法度だ。

地球で科学者の大半はおおやけにそのことを公言しない。おおやけの場で公言するのは生命や精神の自然発生は無い、これは真理だという。それはそうだ。物質だからな。人類を始め万物万類は場に本体があるのが、本来の姿だという考えには至らない。これは実験と検証しかないな。科学者が納得いく成果を示すしかないな。誰にでも分かるようにしなければ分かるまい。

誰が使ったアマとサヌキを補充するのか。使えば当然在庫は減る。トマトはトマトになるために一所懸命なのに、トマトにしてみればポマトは迷惑の極みだ。ポマトが場にあるならとつくにポマトは自然に生えている。トマトはトマト、ポテトはポテト、になりたいのだ。自然でも遺伝子組み換えが起きている。だがそれは場の完全なる自然界の原型に近づくためだ。場にある完全なる遺伝子のデオキシリボ核酸の設計図に基づいて、遺伝子が生まれ変わる。花が黄色いのは黄色になりたいからだ。それを実験のために赤や紫や青にしてみようのはすぎまじい迷惑である。

現行の地球の社会制度では真理にアクセスできない。森羅万象とはなんぞや。それがなんだか分かる社会制度になっていない。試行錯誤を繰り返す社会制度ではいつまで経っても完全な社会制度に移行しない。

鍵を握るのは場力の共鳴を実現している星と星を繋いでいる宇宙文明と場の力への愛情である。地球人も嘗てそうだったのだから、日本人も二千年前までそうだった。それなら

神靈界物質界の二千年と決別しもとの昔にかえる。天然は偉大な文明だ。最先端の科学だ。おもしろいことがいっぱいある。天然が作る文明の莊嚴たること間違いないし。

自然界で循環する、例えば水、雨にしても偉大な働きがある。物質の科学では、海から蒸発した水蒸気が上空で冷えて、液体になつて重力に引かれて落ちてきたに過ぎない。そうだ、確かにその通りだ。だが、それだけではないのだ。たまたま偶然に雨になつたりしない。場の計画通りに雨になつた。一滴の雨の粒の一個の水素原子にも森羅万象の煌めきがある。それを降水量がいくら、降水確率は10パーセントでは、雨が泣くよ。恵みの雨の有り難み、誰が実感できようか。

折角の雨が、屋根から排水溝へ、そのまま下水に直通。大人は服が濡れるとか、電車が遅れるとか言う。万事そうではないか。おいおい、それで、どうするのか。胎児の時から自然と隔離されて、母体になる前に自然から離され、自然の有り難みを知らないで大人になる。生まれても場力の有り難みを知らない。妊娠する時でさえ場の有り難みを知らずに妊娠している。

神靈も物質も、場のご意向を知らない。このことが大規模な人類全体の適合障害を起こしている。社会制度が人類にも場にも適合できていない。不完全な社会制度を維持するために人類は疲弊しきつていく。

極めて危険な状態だ。だが住めば都というように人類は適合できない制度に、適合しようとして難行苦行の果てに栄光を掴めると信じている。だが人生、草臥れてなにもない。我慢に我慢を重ねる社会制度も全く人類に有害無益だ。古の賢者明哲が警告した哲理を見失つた人類の危うさにはいい加減に目覚めるべきだ。不完全な知識で自然を扱う危うさを認める

べきだ。簡単に完全になれる。完全無欠は單純明快。複雑怪奇な不完全などいらん。成熟した文化文明に移行すべし。

自然界では禽獸虫けらに至るまですべてが場と連動している。なぜ人間が雑草と引っこ抜く草木でさえ、場の存在を知っているのに地球人にわからない。縄文人も当たり前とコンタクトしていたのに、現在の地球人だけにコンタクトできないことがあるのか。ありやしない。複雑怪奇な神靈や物質に惑わされ單純明快過ぎて気が付かないだけだ。学校や会社、社会制度の教えがチンプンカンプンだからわけも分からず感心してすっかり惑わされピンボケした意識で迂闊にも見逃したに過ぎない。

分らないからとにかくハイハイと頭を下げ、社会通念の建前でコーティングして済ます。そのために深入りしない。コピーできないものはない。何にでもなれる。ところが場には気が付かない。何でも出来る社会制度と言いながらろくな福祉も出来ない。蟻んこ一匹でさえ知っていることさえ人間には分かっている。原爆を作る科学より、米粒を稔らす稲のほうが偉大だとまだ分からんか。産業廃棄物を生み出すプラントより、落葉を分解する細菌のほうが偉大だ。

環境破壊や公害を起こすのは場に原型がないものを作るからだ。本体が場に在れば自然とリサイクルできる。場には完全無欠の文明が一式在るのだから場から英知を拝借して、企画設計製造完成の段階まで場に本体がある完成品を作ればよい。どこの星でも開闢以来の伝統だ。生命に満ちた奇跡の惑星地球の宇宙唯一の知性を自認する地球の今時の科学者よ。なして知性生命精神自然發生の法則に辿り着かんかい。宇宙を望遠鏡や探査衛星で見ている月人の存在を見つけれんとは不可解の極みなり。

天然自然では、場力共鳴は高位地で行われる。高位地は高位置を結んだ高位地だけではない。実は人体にもある。地面にもある。細胞にしる代謝は力だけではない。命を支える細胞は工場であり様様な反応が起きている。秩序だった組織になつてゐる。意志を持ち、量子の振る舞いもしかり。力に情報やエネルギーが送り込まれる。それは無限に源を発している。

配置

自然界に文明がどこにあるか。猿がテレビを作つたりしないではないか。それは場にある。人間以外のすべては場と連動している。どうやって連動するか。場力共鳴である。それはどこか。高位置同士を繋いだ高位地にある。場力共鳴のアクセスポイントは高位地である。取り分け理想からすれば東西南北と良線が山に囲まれた中心が山になつてゐる山がよい。

自然界では場の量子の運動は田圃の田の字を描くように宇宙に充滿している。高位地と低位地が基盤の柁目状に現れることから分かる。田圃の田の字の形に循環しているから高位地と低位地が柁状に配列する。場の量子の循環経路に従い高位地、普通地、低位地が田圃の田の字のように配列するなら地の利を見れば場の循環する様子が見える。表田の形に循環経路を最適化するように区画整理すれば場力の共鳴は最適化され高品質の高位地になる。

場に現れるパターンが力に現れた、田圃の田の字のパターンがそうだ。この行列表柁に

注目する。場に本体のあるものが田の字のパターンの通りに動けば当然、追い風になり楽に進むが、田の字を掻き乱すように動けば向い風になる。場と力を共鳴させて高位地を作るには田の字の形に区画整理する。三角とか五角に区画整理すると場力の共鳴は阻害され共鳴にならない。

高位地を田圃の田の字に区画整理するとより高品質な高位地になる。低位地を田圃の田の字に区画整理すると高位地化する。ところがグシャグシャに区画整理すると、高位地が低位地化し、低位地は尚更酷い低位地になってしまう。場力の出入口を昔から竜脈とかダイダラボッチのあし跡とか言ってきた。そのロードマップを作つて見れば分かるよ。そこが場力の出入口だ。龍神伝説がある処なんかは大抵その地域で最も重要な高位地である。関東平野を通る最高の高位線は、富士山と筑波山を結ぶ高位線で地図で見れば分かる。八王子の辺りを通る。丁度、日本の八王の天子の武蔵野にある御陵を通して。縄文時代の遺跡があるところや、古来より古墳や古い神社仏閣があるところは、大抵、元元は高位地である。人体にも経絡秘孔がある。ここで重要なことは構造があるということだ。場は力の領域に構造を作る。たんに偶然の組み合わせで出来ていない。きちんとした役割分担を考えて区画整理する。

区画整理も完全無欠の設計図が場にある。構成要素が組織構造に違反して組織の構成を乱せば組織は崩壊してしまう。区画整理も同様に場に設計図がある。どこになにを配置するか、大体、決まっている。都市の設計図は基本は同じだ。町を作り何をするか。人間が住むためだ。そこには、場の意図がある。時空間には人間が快適に住むための森羅万象の工夫が沢山ある。都市も時空の構造を取入れて計画すべきだ。都市の中で生活する。そ

こには場力共鳴するための生活を作るべきだ。

都市の設計は、チップの配線と同じだ。配線の中を電子が入り出してチップが動く。チップのうえには、トランジスタやコンデンサー、ダイオードなど、様々な素子が乗っている。都市計画もチップの配線も最高最善完全は場にある。企画から完成まで場に本体が在るべきだ。

人体の設計も、場に本来の自分がある。完全なる自分は場にある。完全であるとは場と連動していることである。場を完全に取り込んだり場に送り返したり出来ることである。秩序ある無限の動力源。無限と連動するには場の秩序に従うことである。場の秩序と同じ構造を構築した時、共鳴が起こる。完全無欠の情報やエネルギーが無限度。都市の建物にしろチップの配線にしろ人体の組織にしろ新鮮な場力共鳴で溢れている必要がある。

量子にしろ人体にしろ、陰陽、男女がある。この構造は両性の同意に基づいて出来ている。相性が合わねば成り立たない。自然界では両性の合意に基づき、天国が出来ている。自然界では不自然な両性の合意はない。両性、陰陽は、常に求め合い結合する。

両性の結合に基づき新たな命が生まれる。両性の合意は子を産む。両性を変化させるだけでなく新たに生み出す。場力の結合は両性の同意でありそこに奇跡が宿る。場には創造と結合の設計図があり完全なる子孫を残す指示書が溢れている。こんな偉大なものを使わない手はない。公共の福祉や基本的人権の尊重のためなら幾らでも湧いて出る。不自然窮まりない結合は誤差を生み出す。

力にある物の構造の要素の最小は量子である。量子はどこへ行こうとするのか。量子は一個一個、命を持ち意志がある。そこで量子にご意向を聞くわけだ。決して人間の命令通

りには動かない。法則を人間が決めても量子が必ず守るわけではない。量子が意志で動いてそれを見た人類が法則を生み出した。量子の好みを人類が見つけたに過ぎない。量子は好みでなければ嫌がる。そこで法則とは違うことが起こる。

人類の欲している好みや、量子や天然の好みが、一致しない場合が起こりえる。人類は量子や天然を無理矢理従わせた。当然、量子や自然にはストレスが溜り、不満が渦巻く。それが誤差である。人類は自分の原型に違反して自分と遠く離れ、自分自身と無関係になつてしまった。欲望のままに暴走し地球を地球自身から遠い姿にしてしまった。場には本体があるのが自然だ。人類の生活必需品は場によい物がたくさんある。場にある生活必需品を作るのが本来の姿だ。

本来、場に本体があるのだから場を求めるのが筋だ。ところが目先の欲望で動く地球のサラリーマン。量子一個でさえ場を知っているのに、人間が知りませんではなんと不可解な。地球人に分かり易く場力の共鳴を実感させる。そのためには、アトムがマネーを超えることを示す。場力共鳴が成るなら当然情報やエネルギーを取り出せる。量子が意志を持ち、命があるなら、場を通訳にできる装置が出来る。本体が場にあるなら、人間の本体と通信交通出来る装置の開発を我我は出来るはずだ。

素材の吟味

そのような装置の構造や素材は何だろう。それも答えは場にある。人間の肉体や自然界では当たり前宇宙共鳴高位地構造だ。地球人はこの構造を理解していないから共鳴装置

が作れない。使っている科学を見れば分かる。それは、科学の熱力学の第二法則だ。これは力の領域しか見ないことを端的に示している。宇宙構造を無限を見ずに有限で考えている。エントロピーが減少する動力源は無限である。本来、動力源には打ってつけた。

だが、科学者はそれを否定する。物質でないからだ。否定するための論理を構築し運用している。それが科学だ。場の理論はエントロピーを減少させる。これでは科学者は受け入れまい。物質を広めるのが科学だ。人類が幸福を実感するとき場力の呼吸共鳴が起こるが科学者は場の介入を認めない。

この話しをしても恐ろしい科学者は複雑な理論を展開しあり得ないと説き伏せるだろう。人類の幸福を場と切り離す理論を掲げる。不完全な科学が発展すればするほど天然が減っていく。天然成分を増大させるのが一番善いと分かっているても科学者には自然を理解出来ないことになる。

人類が宇宙の地平線の向こう側から来たとは認めない。知識や技術を独占する科学が場の敵にまわっている。研究開発には、科学が付き物だが科学が科学の本質を知らないとは不可解だ。研究開発や独創は知性生命精神であるがそれがどのようになっているか知らないとは。空間の背後にある共鳴構造に科学者が気づけばいいのだ。

エントロピーの増大は密閉した部屋の中で酸欠状態のようなものだ。酸欠で死んでしまふ。熱力学の第二法則を掲げる物質の科学は宇宙をコンチニウムの地平線からゼロ光年までを範囲としその中でエントロピーの増大をうたう。だがそれは換気を否定するがごときだ。閉鎖された部屋の中で生態系が維持出来ないように時空間でも閉鎖系では維持出来ない。有限の時空間の向こう側に更なる時空間があり、その向こうにもさらにその向こうに

もと、無限を扱う時空間生態系の考えがある。

時空間には、原型となる時空間があつて、その原型となる時空間に寸分違わぬ方向に向かつていく。その原型となる時空間にはさらに元になる時空間があつて、その元の元になる時空間が発展し、より進化した本来あるべき姿に向かつていく、共鳴による調和による時空を越えて出入りする量子が供給する完全完成成分が、知性生命精神ではないかと考えねば知性生命精神は説明出来ないと考えられる。

物質の持つエネルギーは小さい。力にある量子は本体は場にある。共鳴し合えば力が湧いて出る。量子に意識があるなら念じて動かない。それは場を通さないからだ。本体の場を動かさねば場の影に当たる力の量子は動かない。意識が脳の働きに過ぎないから念じて何も起こらない。知性生命精神の情報やエネルギーの制御は場との関わりです。量子の情報やエネルギーを制御しているのも場だ。念じることと場と作用するかしないかである。

物質だけが単体として力にあることはあり得ない。意識は場の本体の影に過ぎない。大きな情報やエネルギーは場の本体が持つ。意識自体は、大した情報やエネルギーを持たない。意識が場の本体を運転出来ねば意識は大きなエネルギーを持たない。場を通すことで運転出来ねば意識は小さい情報やエネルギーしか持たず念じても物体を動かすことは出来ない。念じただけでは動かない。念じることと場の共鳴機構のスイッチの入り切りをし、場の単体を運転し、場の本体同士が相互作用してその結果が力の物体に影響を与える。

このことからイメージで場力の共鳴が出来る装置を作れるはずだ。しかも時空間には、共鳴機構がある。コンチニウムの我我の持つてゐる構造を使う。天然は天然にとって必要

な場力共鳴機構を天然自身が構築している。ところが地球の人間が地球人にとって必要な場力共鳴機構を地球人自身の手で構築出来ない。天然に学び自然を参考にしても、人間にとって必要な文明が場力共鳴を構築出来ない。天然に学ぶ自然を頼る方法で解決するしかない。

ここが重要だ。物質の考えの奪い合う、強い者勝ちの世を修正しようとしても、上に立つ勝組勢力の抵抗にあい上手く行かない。勝組は、争いに、勝つことを、黙認する。競争に勝つ残ることで栄光を掴む社会制度が物質を支え、物質が強い者勝ちの世を作るのだ。地球に充滿するお金、株、債権、証券、これらはすべて、場にとつて価値はない。

地球人が求めるこれらはすべて力でしか通用しない、しかも地球でしか使われない。しかも使えば戦争を生み出すことを知りながら、競争や弱肉強食が製品を改良し不良品がなく高品質を提供し、人間を鍛えて進歩させるという大義を掲げる。

だが、物質や宗教は実際に無限を考えない。宇宙の地平線と四次元コンチニウムとバキームは完全に断絶していない。四次元コンチニウムは密閉された時空間ではない。呼吸しているのだ。お金のお布施を徳とする、神霊の存在を証明出来ずにいる宗教家も、古の賢者明哲の真意は、実際の処は何を語ったのかを真剣に考えるべきだ。人類はほかの生き物ではない。人間は人間だ。人は人に成るしかない。人は人に帰るしかない。人類の故郷は場だ。いつかは場に帰る。

社会制度と認識の有り様は相互作用する。物質という科学の認識の形態が争って勝負を決する社会制度を生み出しそのために都合の良い地球の力にしか通用しないお金を生み出す。社会制度は勝組が押さえ勝組の都合の良い社会に出来あがつていく。階層構造に成っている社会制度のトップは、組織を常に変革し世の中に合わせまた世の中を変えていく。

そのためなかなか場に気が付かない社会になる。場の愛は地に堕ち、高貴な品格は汚れにまみれ、命は朽ち果てていく。

地球人類が老廃物を地球に貯め込んだために地球の環境は悪化しゴミ捨て場と化している。観念で宗教の神霊や物質の科学を構築しても絵に描いた餅。時空の構造に違反したら人間の思い描いた通りに実現せんよ。すべては場の本体とどのように共鳴しているのか。人間の意識は場の本体の意識と、どうやってコンタクトしているのか。それは時空を超えた量子の出入りで、量子を初め超銀河団も四次元コンチニウムの背後も宇宙の地平線の向こう側も意識を持つ。人間が意識の使い方を知らないだけだ。

量子の時空を超えた出入りが意識を起こす。無限からくる時空を超えた場力共鳴の量子の出入りが意識だ。無限を扱う量子論が意識を自覚する。意識が意識を自覚できないのは意識の源を自覚出来ないからだ。意識の源を自覚出来れば意識の有りが分かる。意識は意識出来る。意識の源を意識が意識出来る。それなら何が意識を起こすのか、それは意識があること自体共鳴構造に成っている。

ようは無限が見えるかだ。自覚出来るかだ。意識の、知性生命精神が見える。認識が生じ、実態としてイメージが、色艶形匂い、手触り、個数、動いている様子、止まりかた、音や輝きまで手に取るようにリアル。その時、なにがどうなる、それが見える。その時、無限との共鳴を意識しているのだ。森羅万象のスイッチがオン。意識の代謝が、始まる。意識が本来の性能を取り戻し、命が生まれ変わる。自分に気付く時、そこから始まり意識の呼吸が始まる。

場力の量子の対発生、対消滅、零点振動、トンネル効果が起こる。量子の出入りが増大

し意識が目覚める。無限を自覚する。今、ここにいる。それは、現在過去未来の永遠の今だ。それは無限にさえられている。無限の構造は只の今だ。今、こうしている。それが、無限の構造だ。そこで使っていないかつた構造が動く。無限からくる栄養が場で止まつていたら意識は貧弱、性能をほとんど發揮していない。共鳴が無いと実力をほとんど發揮しないし、發揮出来ない。

宇宙共鳴構造に秘密がある。その装置が八尋殿にヒヒロカネである。縄文時代はこの八尋殿とヒヒロカネの時代であつたのだ。有限の実在を超えて無限を見ることだ。それは表田の奥義だ。

量子の作用に過ぎない概念の所有

物質の科学、神霊の宗教も、場力が共鳴を起こすことを考えていない。教義や理論は、概念であり共鳴が出来ない。概念は実在の本体ではない。概念は意識と同様に実在の本体の影だ。実在しない意識がいう概念は場に共鳴構造を持たない。実在する共鳴構造が生み出した影が意識だ。物質は場を考えていないから共鳴構造を無視している。すべては物質で出来ている。それは言葉だ。

意識とはなんぞや。それは言葉だ。なら二つは同じものだ。量子も意識も言葉だ。言葉とはなんぞやで、意識も量子も、説明出来ねばならない。言葉で、量子の本質も、意識の本質も、その相関関係が立証できねばならない。

物質は意識と相互作用しないでは、量子は言葉と関係ない。人の心が量子で説明出来な

い。化学反応に過ぎないでは、人の心が説明出来ない。何故か。コンピュータの原理のオノフ二進論では研究開発能力が成り立たないことが証明されている。シナプスの反応だけでは意志が生じない。意志さえ作り出せる自然が作る代謝のシステムを、実験室で人間は作り出せない。物質というモデルの限界だ。

物質で意志を作り出せないなら、すべて、意志も意識も、物質の化学反応にすぎないという証明が成り立たない。物質で生命を作り出せないなら生命や意志や言葉や文字を理解する機械を作り出すことが出来ないなら、それは目の前にある命は存在しないことになるのか、いいや、そんなことはない。つまり、存在を定義できないのだ。

自然が壮大で人間の試行錯誤が自然の想定する誤差の範囲内だから地球が破滅しないにすぎない。人間が尊大になり過ぎてしまうと破滅する。科学者や宗教家も政治家や経営者も、所有の本質が言葉であり、あまり、目に余る尊大を構築すると自滅するのだ。自分こそが一番を指すことで、森羅万象を軽んじて、尊大になりすぎて、自然をぶつ壊すことはやめていただきたい。

自分は誰のものか。所有の定義だ。あらゆるすべてから見れば所有とはあらゆるすべて自身のことだ。自分自身でさえ、あらゆるすべてであるからだ。場力と星の循環が人間の知性を生み出すなら、頭脳の活動が概念を生み出すなら、所有の定義は所詮、人間の精神活動が生み出したものに過ぎないのだ。

それなら精神活動を生み出す場力と星を循環する量子の作用の働きを使うならば、所有の本来の定義や、あるべきすがたの所有の姿を構築できる。自分とは何か、自分は誰のものか、それは量子の作用が働いたに過ぎない。自分を自分というのも、その量子の作用に

過ぎない。

今、ここにいるというのも量子の作用だ。従つて、本来は自分は天然の相互作用に過ぎない。そこで、分かつたのが概念が実在しないという事実だ。所有は概念に過ぎない。生じた概念は精神活動の産物である。従つて自分より自然のほうがより上位にある。天祥地瑞の時代や縄文時代、人間の意志は量子循環呼吸で意志を自在に発生させて、自分で自分をリフレッシュ出来た。

自分が自分であるとするから、それが量子の循環を止める。それが霊主体従以降の物語の世界を作る。天然の醸す作用に所有の定義や分配を構築させる。それこそが量子の本領を発揮する。かつての地球でもこの作用を使い物資を分配していた。自分のものという考へは精神活動による老廃物だ。それより新鮮な量子が供給されるように、要らないゴミを掃き出したほうがよい。

人間の寸借法で演算しないほうがよい。それは無限との整合性がとれないからだ。量子の作用に過ぎない有限の人間の産物の概念が自然を超えようとしても自分のもとさえ超えられない。量子に分配を任せ、さらに言葉の指南をさせるならば、完全需要や完全供給や完全雇用が実現する。

所有の問題は量子の作用で解決する。地球の所有の考えは精神の活動の産物の概念で、我田引水を繰り返して摩擦を起こしている。概念は完全無欠の活動した産物であり、肝心なのは栄養である完全無欠の供給をとめないことであり、老廃物の概念に過ぎない所有という考えを排出することだ。

体内に所有欲という概念の老廃物が溜りすぎて、大病を煩うのが今の資本家だ。肥満が

成人病の予備軍であるように様々な精神にも肉体にも老廃物が溜りすぎたのは結果論から言えば、場力と星を循環する量子の作用を使わないからだ。意識が老廃物をため込んで喜んでいる。

それは場力と星の良さを知らないからだ。頭脳が老廃物にまみれるより頭脳が場力と星を循環する量子の作用に従ったほうがよいのだ。なぜなら無限のほうが完全無欠を供給することが出来るからだ。頭脳に無限ほどの才覚はない。偉大な自然に学んだほうが、賢明だ。

表田のアザムを使いこなす生活をしていた縄文の民のほうがよほど、人間の才覚を発揮していた。今の人類に生き物としての才覚はまったく発揮できないこの現状をなんとするか。

宗教が神霊の実在を証明出来なかったように、目の前にある。ただそれだけが、それを説明しようとするとき、突き詰めていくと科学もまた物質を定義しその実在を証明出来ない。あるということを証明しようとするとき、見えるとか触れるとかで決めるが、見えるとか触れるとか、いうのは何なのか、人間は考えるが、答えられない。それは考えるからだ。目の前にある測定出来るものを物質と言って、それを体系化して科学という。

科学は物質の成り立ちを考えても物質そのものを作り出せないし、対象を観察し体系化するだけで、そのやり方では、それがなんぞやには、答えられない。人間の考案した物質を証明できないだけだ。物質や生命の誕生を人工的に再現出来ないから、物質という考えの正しさは必ずしも証明されていない。再現性がないと科学ではない。生命や物質の誕生を再現できない科学は未完成だ。

人類の不完全な活動を黙認して良いのか。知識が正しく使えるようになるまで、自然を改造すべきでは、ないはずだ。場力と星を循環する量子の作用を正しく精神が表田出来るまでは自然を破壊すべきではないが、暴走した人類は聞き入れないだろう。だが、暴走しても、暴走とは、何と、つまらない、自然の代謝が何とありがたいと、実感すれば暴走がとまる。

天然であるべきだ

古の賢者明哲は廃れ行く場力と星から星への哲理を嘆き、宗教を起こす。賢者明哲の教えは、宗教団体の団を作るな、誠の神は伽藍には降らない、しかし迷える人人を救え、神の道を広めよ、であつて、摩擦を起こすなであるが、賢者明哲の場力と星の真実の教えに反する教義やお布施で大きくなる教団が出来て神霊を説くようになっていく。いくら熱心に信心してもお布施にしても神霊には御利益の効果が無いことが分かつてくる。

人生とは何ぞや、それは言葉だ、言葉つて何ぞや、てつ、ことになる。とつすると何でもかんでも言葉だになる。すべては量子から出来ている。とつすると二つは同じものだ。科学は量子と人の心は関係ないというが量子自体は人間が作ったのではない、自然が作ったのだ。量子と心が関係するかは人間が意図することではない。自然と決まるのだ。

人間が量子に命じて量子は自然という通訳を経由しなければ量子には人間のことが分からない。人の心と量子は場を通訳に使えばコミュニケーションが取れる。言葉は場を、通訳に通せば人は言葉で量子と分かり合える。量子は自然のご意向で動くのだ。人知で動

かない。人知で意のままに動かないから知性がないというのは人間の傲慢だ。量子をよく見れば人間の意志さえ作り出す場力共鳴しているではないか。

量子は時空間を超えて場と共鳴し自然界全体を動かすコードで動いている。何でも自然界は場のコードに従い動いている。ところが人の心も本来は場のコードが読み書き出来るはずだが人の心は読み書きの仕方知らない。読み書き算盤の仕方が分からんから物質というのだ。出来れば物質みたいな考えには至らない。量子も人間と同じで意識を持ち生老病死がある。自然界では一生は基本的に人間と変わらない。人間の一生が自然界と変わらないというべきか。

自然の側で意識を制御している。人間がコントロールしているのではない。人がどうしようとは無限は無限。量子も人と同じ生老病死がある。人間の幸福とは何だろう。基準はいろいろあるが幸福も森羅万象からいずる。なら森羅万象の流れに乗るのが一番最も幸福が含まれる。時空を越えて量子が入り出す時、力の量子が高位地で場の栄養を受け取り、老廃物を場に吐き出す。

人の幸福は場のサイクルに乗ることだ。サイクルを回す。体内で血液が循環するように場力の呼吸をする。酸素を運ぶヘモグロビンのように場の栄養を運ぶ。知性生命精神は、活動し、力に天然自然成分を蓄積していく。知性生命精神の活動は時空を越えて現れる。

人類の幸福は自然が行う成分の蓄積の復習である。文明が天然自然成分を消費しては人類の幸福は汚染され無くなる。働いても働いてもそれは幸福を破壊することであり。天然自然は汚染され公害やストレスで人心は荒廃して行く。持てるものと持たざるものの貧富の格差は増大し下克上の世が出来る。

生き物は皆天然自然成分の増大を目指し活動する。知性生命精神の活動は天然自然成分を合成する。しかし、神霊や物質に惑わされ社会制度が場に適合、出来ない。古代では、天然自然成分が当たり前。縄文時代、一目で人工の産物という物は縄文の感性には合わない。誰がどう見ても天然自然というのが縄文だ。

東西南北と良線に山がある中心にある山が最高の高位地だ。人類が幸福を手に入れるためには自然がどのように場力の呼吸や代謝を行っているか知るしかない。最高の幸福は、天然にあり。人類が自然の呼吸に合わせるか。それとも人類の都合に自然を従わせるか。近代欧米合理主義は欧米の都合のいいように自然を搾取した。都合の悪いのは爆弾でぶつ飛ばす。自分たちの支配が崩れ、欧米の天下が覆るなら、巨大戦争で地球ごと破壊することも厭わないだろう。果たしてそんな社会制度が人類にとって幸福だろうか。

人類を頂点とする社会制度は価値を人為的に決める。その社会制度は場のサイクルを従わせてきた。それが人類を苦しめる。社会制度を支えるために人類は、人類自身が作った組織の搾取に苦しむことになる。そのしわ寄せに天然から富を略奪する。宗教団体の団とか科学の殿堂とかの人類の社会制度が場の原型から富を奪うようになったからだ。そんな制度はいらん。制度を場力の呼吸に合わせてることが支配階級に出来んか。

知性は人だけ。それは物質を掲げる欧米合理主義だ。その社会モデルは欧米を中心として出来ている。人間は自然や外敵から身を守ることで進歩する。驚異な自然を人間に従わせることで人間は文明を起こしたという社会モデルを唱える。だが、自然発生する知性に社会制度を合わせると幸福になれる。人にとって嬉しい社会制度。人間を支える真理を使うことだ。

心があるのは人だけで、ほかの生き物にはないというのはまっかな嘘。それは場を考えないからだ。場の量子の流れを見れば万物と心を通じ合える。欧米の合理主義が人間だけが、愛を持つ生き物で、ほかの生き物は機械と同じで、心を持たないと考え、欧米を中心とした基準を作る。欧米は自然に挑戦し戦いを挑む。そのやり方は欧米は自然を敵としている。

天然が知性生命精神を支えている。時空には、天然自然成分を自然発生させる作用がある。天然を食い潰すやり方は、それを見なしていない。自然や人類にとつて好ましいのはどういうことか。

人類や自然にとつて最も良い乗り物を考えて見た時に乗り物は場と力の呼吸で動くのがよい。場の量子の流れに乗る。共鳴で力の特性を消し場になる。そして目的地に着いたらまた力の特性を復元し力に実体として元に戻る。場の流れに乗ることは力に原型の通りの流れを再現することになる。オイルで走る車、爆発力で進むロケット、ジェットガスで動くジェット機、これらは天然成分を消費して動くエンジンで動く。エンジンは場力共鳴の量子呼吸の腸脳発電で動くべきだ。オイルを燃やすのでは場が乱れる。環境が悪化する。騒音も排気ガスもない場の量子の流れに乗るエンジンであるべきだ。場の原型通りの、田圃の田の字を人が外回りで描くことで力の時空間にロードマップの記録が残る。四次元コンチニウムは耕され力の時空間は量子呼吸が楽になる。乗るだけで人の腸脳発電が楽しくなり人生は豊かになる。起動するだけで環境は良くなりそれが飛行すれば美しい。無音で航行し時空を超えて航行する。場力共鳴を自身でする自律航行タイプは、燃料で動くのではないからガス欠もない。場力共鳴をバッテリーするタイプはチャージで動くか

らガス欠はあるが排気バスはない。ロケットやジェットのように騒音もない。近距離はバッテリーで長距離は自律呼吸タイプ。バッテリータイプは自律呼吸で動く母船とペアで動く。三次元航行が可能で場の量子の流れに乗る制御で信号もない。交通法規はなく天然の流れがすべて。

乗り物も場力共鳴を最適にする乗り物でなければならない。宇宙の構造と同じ必要がある。量子呼吸を最適化する装置という前提であるべきだ。森羅万象の循環が乗り物であるべきだ。人間の動きが共鳴を掻き乱してはいけない。共鳴と連動することで乗り物が動くべきなのだ。

社会制度にしろ乗り物にしろ場力を連動させる。人類の営みが真理から誤差が生じないようにすべきなのだ。だが、人類は守るべき生命や精神の定義さえ出来てはいない。その定義とは、それは言葉だ。では言葉とは何ぞや。それはすべてだ。それも、これも、すべて言葉だ。それならその辺にあるもんから、生命や精神も、全部言葉だ。そのとき身の回りに無限を見る。それを人類が守るべきなのだ。それがないと真理の保証する権利が見えない。

法律の保証する権利は人が守る。だが法律を回すのも同じ人。法律を運用すればするほど法律に適合した人が有利で向かない人が不利になる。改正しても新たな不公平が生じるだけだ。このことは人類が人類を支配出来ないことを示す。人類が人類を支配する限り争いが起こる。宇宙の構造に反旗を翻すからだ。時空の構造は人類に人権を保障しサービスを提供する。知性生命精神を供給し天然自然成分を供給する時空と共鳴すれば、幾らでも人権や福祉は受け放題。完全なるサービスで非の打ち所がない。

人は生まれ死んでいく。太古からの歴史を失い迷う地球の人類。だが、考えてみるがい。人は真理には勝てない。人は真実に戦いを挑んでも歯が立たない。だが人類は知るべきだ。自然は人を苦しめない。自然は戦うべき相手ではない。人類にとつて争うべき相手などいない。地球人が記憶を失い、路頭に迷うから怖い夢を見る。知性生命精神が時空まで起源を遡れるなら病気の起源も時空にまで遡る。細胞が生まれるのに時空の背後からの法則が働くなら、精神や肉体に病が起きるのは時空間に病が起きたからになる。

これは重大だ。何故なら地球では法律で決めるが天然は人間の決めた法則や法律に従わない。細菌やウイルスを法律で規制出来ない。生命や精神を定義出来ない物質で法律を決めても細菌やウイルスは無関係。人類の活動の全容が解明されていないのに人類は活動している。人類が法律や法則ばかり決めて安全だとしても自然は無関係。そこで人類は自然を敵と見なし押さえ込む。それが人類を滅ぼす。時空まで法律や法則に従わない。法律や法則の運用は無限度で広がらない。

人類が幾ら法律や法則で安全だと言ってもそれは人間の決めた範囲内での話であり無限の範囲までではない。無限の範囲から予期せぬ事態が起こる。そこでさらに囲いを作る。それでも無駄。人間の人間による人間のための法律は無駄だ。時空を超えて来る森羅万象に人類は歯が立たない。もとは人類は時空を超えてきたのだから元を考える。人間の人間による人間のための権利は觀念上の存在で実在しない。実在するのは、場の保証する権利だ。

人類が健康の定義を確立できない背景は皆、言葉の定義と同じで知性生命精神自然発生の場力共鳴の量子呼吸の問題である。健康とは場力共鳴であるのなら神霊や物質では人類

は、心や命を定義出来ない。宗教や科学では健康になれない。社会に出て働き、子を育て神社仏閣で結婚式を挙げ七五三や初詣をして串玉料を払っても、人生の本質に近寄ることすらなく朽ち果てて死んでいく。このような社会制度が、いいはずない。大事な健康さえ提供出来ぬ保険制度ではないか。

そこにあるのはいつも同じだ。人類を幸せにするのはいつも自然だ。人為ではない。だが、物質や神霊を起こしたために代謝を行う天然成分が逼迫している。在庫が無くなりかけているが、人類の人類による人類のための社会制度を維持しようとする人人の圧力団体のために、自然は食い潰されようとしている。人類の大義を掲げる慈善団体は自然の迷惑を宣伝しない。地球人類の愛と正義を掲げ、地球だけに人類はいて、その尊厳を語るが、時空に人類を作る作用があるとはどの圧力団体も言わない。

なぜか国際的科学の慈善的啓蒙団体は地球だけが特別な星と言わんばかり。宗教と科学の棲み分けをしている。それでは人は人の真相にたどり着く前に人生を終えることになる社会制度が出来る。幾ら汗を流し働いて立派に家を建て、子を育て有難い尾題目を聞いてお布施を積んでも人生は無意味。慈善活動に精を出しても世の中は滅びる。それは地球も無限の一部であり場力共鳴で成り立つのに、宗教や科学のパワーで自然の代謝から搾取するからだ。

人類による社会制度の運用に固執する圧力団体が猛威を振るう社会制度の中、圧力団体は自分たちのパワーが失われることを恐れ圧力を行使している。法律や法則でプロテクトされた圧力団体は人類の尊厳を信じている。だが、そう思えるパワーも自然から湧いたのだ。エゴも自然である。無限の前ではエゴもセルフも差はない。誤差の程度に過ぎない。

しかし彼らは場力の真相を潰し、地球人類が最高の英知であると証明しようとしている。自分たちの邪魔者は消そうとする。自分たちだけの天下を維持しようとするれば仕方がない。それが歴史だ。やがて人類は神霊や物質さえも支配しようとする。逆らうなら宗教だろうがぶつ飛ばすようになった。そして今、人類のいう三権分立も、主権国家も、すべて自然が支えているのに、自分が地球之長だという自尊心ゆえに、その自然にさえ反抗しようとしている。

自分の原型に逆らえば、自分がぶつ飛ぶ。今、地球はその危機に直面している。地球の支配者は、自分たちが地球を動かしているのだから、自分たちの地球の保全のために驚異から自衛をしても当然と、戦争の準備をする。だがな驚異とはなんだ。支配階級を脅かす存在であり、権力者が支配出来ない存在のことだ。

権力闘争というものは今でも続いている。人類が生み出した法律は支配権を生みだし、その権利を巡る暗闘は今でも行われている。戦争は無くならないし、人心の荒廃も止まらない。圧力団体も宗教家や科学者は場力や星から星への哲理を考えたがらない。人類が、本気になつて取り組めば真相は明らかにになる。

忙しく働く地球人に考える時間はない。人類の制度が変化して組み合わせられる。だがその組み合わせは常に天然を消費する。場を考えないからだ。森羅万象を考慮に入れて人の故郷が場だとしたらそれは宗教のいう神霊界や科学の物質史観を吹き飛ばしてしまう。

到底、政治家たちが受け入れそうもない。科学者も宗教家もそれを認めようとしないだろう。そこで一般的な発表として、惑星探査で月にも金星にも人類がない、文明もないことが確かめられた。知性生命精神自然発生の法則は嘘。偉大な宇宙文明があるならワザ

ワザ隠蔽^{いんぺい}する必要^{ひつよう}はあるまい。そんなすばらしいことは、堂堂^{どうどう}と公開^{こうかい}するべきだ。それを公開^{こうかい}しないのは、宇宙文明^{うちゅうぶんめい}がないからだ、ということになる。

生物質量せいぶつしつりょうとは何かなニ

科学について

型の仕組みを考える上で幕末から戦前が宗教と心霊の時代だ。戦後から冷戦終結までの時代は三千彦の時代の再来である。道彦の時代の心霊と宗教の仕組みと、三千彦の時代の科学と物質の仕組みが、冷戦終結以降の今に二度目の天之岩戸開きとしての国祖の再臨が天祥地瑞として再来することが未だに未編纂の三十九巻である。そこで未だに世に出ていない表田の使い方の型の仕組みを考える。

日本人は欧米を見て莊嚴なことに気をとられ、これは凄くと思ひ最高の教えと思ひ懸命に学んだ。それを日本人は推敲した。その推敲を英語や漢語に翻訳できれば一厘の仕組みだ。日本人は欧米の制度を取り入れる段階で誠心誠意敬意を払い取入れた。そこに四八音の音声基底思念が働いた。四八音の響きを感じた日本人は欧米が探していた響きを見つけた。

だが、神に霊を憑けてパツと萌すと、我が在るの違ひを失った今の日本人は縄文の民のように違ひを自覺して表田のアザムを流暢に使い相手と交渉できない。戦前の日本の良の金神は心霊と宗教の本質を表田のアザムに出来ずに終わる。冷戦の時代に北米の良の金神は物質と科学の本質を説けずにいた。それはあと三十九巻の真実が型として出ていないからだ。

その型は幕末から戦前の心霊と宗教の本質である霊界は存在しないという事実である。それと戦後から冷戦終結までの科学と物質の本質の型である。三千彦の時代、すなわち、一万二千年前、つまり、戦後から冷戦終結までの時代を見ると言霊の仕組みは日本で正当

な型が成らねば成りたない。縄文時代では、四八音の響きを表田していたが、今、その何かが三五教に欠けている。それが幕末から冷戦終結までに欠けている。

表田の視点で見るとないものが見えてくる。宗教の本質も心霊の本質もないだ。存在しないだ。宗教がアザムであるように、科学の表田は逆裏待遇命題である。心霊の時代から物質の時代への移行は、宗教から科学への移行で、ウラル教からバラモン教への移行だ。戦前の日本の良の金神から戦後北米の良の金神への移行だ。金神の活動が霊界から宇宙へ移行する。

知性生命精神と相互作用する心霊から知性生命精神と相互作用しない物質へ主題が移行することだ。宗教はないから表田の砂金取りの仕方理解を広げていくように科学も命題の使い方で砂金取りをする。知性生命精神と相互作用しないなにか、そのなにかのデータを蓄積し、解析して、原因と結果の因果律を説明し利用する学術体系である。しかしデータを蓄積し解析して原因と結果の因果律を説明し利用すればどんなことでも出来るわけではない。

データを蓄積し解析して原因と結果の因果律を説明し利用すればなんでも出来る。しかし実際には我々が存在する前から存在し、我々が存在する今も存在し、我々がなくなつた後も存在する、森羅万象を司る偉大なる真実なる物理法則という均衡器は我々が何をしても変わらない。我々が、何をしても、何を考えても、その均衡器から割り出された寸尺法で演算しているに過ぎないのだ。

知性生命精神と相互作用しない何か。その何かを物質としましょうということに成っている。科学とは何か。実は有史以来いまだかつて完成されていない完全に説明されたこと

の無い未発見の未知の学術体系なのだ。科学という学術体系はいまだに完成されておらず
全容は把握されていないのだ。物質とは何のことかまだ解らない。そこが見えてこそ、そ
こに一厘の仕組みが見える。

英語のサイエンスの意味は物教だ。普遍的真理や法則の発見を目的とした体系的知識だ
けだったら、それは物教である。物教はあらゆるに完全に対応し切れてはいない。何かが
起こるたびに初めからやり直した。科学とは、その言葉自体はあらゆるに完全に対応して
いるということなのだ。日本語の科学は英語にはない。日本語の聖書が英語には存在しな
いように日本人の創作だ。

例えば我が我が学校で習った教科書を時代ごとに並べてみる。百五十年前の江戸時代と、
百年前の大日本帝国時代と、終戦直後と、現在の教科書を、並べて見てみると全然違う。
我が存在する前から存在し、我が存在する今も存在し、我がいなくなつた後も存在
する森羅万象を司る偉大なる真実を、教科書にしていけないからだ。

例えば遺伝子改良食品をめぐる論争だ。遺伝子組み替え業者は自然界の交配による受精
による生殖と試験管の中の遺伝子改良も遺伝子組み替えということは同じで、遺伝子
の組み換えに違いはないと言っている。環境保護団体は、生殖のすべてが解明されていな
い今、試験管による遺伝子組み替えの危険性が確かめられたときには、危険な遺伝子組み
替え食品ばかりになっていて、危険がわかつた時には、手遅れになっているかもしれない
という。

これは未発見の未知に完全に対応していないために起きている。自然界の生殖はすべて
正直に基づいて行われている。自然界の生殖と試験管の遺伝子組み替えの違いは正直であ

るか正直でないかの違いだ。物教は未発見の未知に対応していない。物教が未発見の未知に完全に対応できれば科学なのだ。完全無欠と誤差がないが成り立つ時、未発見の未知に完全に対応できる。

人類が生殖の一举一動一語一句の試行錯誤を、繰り返すようでは科学ではありえない。生殖が完全であるということは、遺伝子操作が森羅万象と誤差がないということである。遺伝子組み換え業者がいうことは、人類の生殖が森羅万象から離れ自分が自分でなくなっている危険な状態にあるにもかかわらず、完全から離れることを、人類の進歩のためにやもおえないと言っている。遺伝子組み換えとは本来、遺伝子を無限に溶かすことだ。時空と融合させ天然自然成分を蓄積していくことだ。

試行錯誤で進化の可能性を説く物教の危険性がここにある。進化とは、森羅万象と誤差がないということと起こる。決して天然の妥協や偶然の産物ではない。ましてや突然変異と弱肉強食の自然淘汰の生存競争のことではない。全知全能完全無欠の森羅万象と誤差がない一語一句一挙一動が成立させるのだ。完全無欠であるという確証が証明できない物教が進化や生命を定義出来ないのは当然だ。生命や進化の定義は完全無欠であるという確証の証明そのものである科学そのものである。

自然界では、鶏が犬に孕ませようとしたり、犬が猫を孕ませようとしたり、猫が鶏を孕ませようとはしない。トマトがジャガイモになろうとか、ジャガイモがトマトになろうとはしない。鶏は鶏を孕ませ、犬は犬を孕ませ、猫は猫を孕ませ、トマトはトマトに育ち、ジャガイモはジャガイモに育つ。自然界の生殖は統べて、正直によりて行われ、あらゆるが考慮されている。

あるがままで常に森羅万象そのままである。だが試験管の遺伝子組み替えは、行き当たりばったり、下手な鉄砲も数うちや当たる、闇夜で鳥を捕まえるごときで、声はすれど姿は見えず、たまたま上手くいっても、めつたに森羅万象のなすがままに成ることは無い。自然界の生殖は、森羅万象のありのままに、なるがままになる故に、あらゆるすべてに、完全に対処する方法を森羅万象のいう通りにする。

しかし、試験管の遺伝子組み替えは、森羅万象つまりあらゆるを考慮に入れていないから、すべてに完全に対処できない。遺伝子組み替え業者が生命の莊嚴な神秘に感謝を現すために、遺伝子組み替えをしているようには見えない。科学という文字を使うんだったら完全無欠と誤差がないことで未発見の未知に完全に対応する学術体系であるはずだ。

未だに一厘の仕組みが成りえない今、物教と科学が定義されていない現実の中で模索される言霊の真実は物教が曲事であるということだ。何故なら一厘の仕組みの言霊が成されれば物教と科学の差がわかるからだ。分からないのは言霊が成されていないからだ。それは無限に根ざしていないからだ。宗教は無限を霊界と捉え、霊界の証明に失敗し、衰退した、そこで心靈の考えの変わりに物質という考えが起る。だが物質を扱う体系は科学が物教が未だ定まらない。

過去の型から考えると、心靈は実在しない無限と有限であり、物質は実在する有限である。従って表田で四八音の響きたる実在する無限を構築する学術体系が本当の科学の本質であり、表田で四八音の響きたる実在する有限を構築する学術体系が物教であつて科学とはいえないことになる。

相互作用について

我我は皆自分も身の回りのものも物質で出来ていると言っている。例えば目の前にペンがあつたとすれば、そのペンは物質から出来ているということに成っている。ところで、物質とは何かというと、物質とは精神と相互作用しない何かを物質と呼ぼうということに成つていて、物質というものは精神と相互作用しないということである。物質という言葉にすれば精神と物質が相互作用するという言葉は間違いで絶対に無いということになる。物質という言葉を使うなら精神力で物質のペンが動いたり曲がつたりということは絶対にありません。ペンが精神と相互作用するとするならば、ペンを物質という言葉からは絶対にはありません。相互作用するとするならば物質以外の別の言葉を使わなくてはなりません。

古の賢者明哲の知恵を参考に使わしてもらい宗教を参考にして説明させてもらえば精神と相互作用しないが物質ならば、その反対とは使い古された古き言葉を尋ねれば心霊になる。精神と相互作用しないの反対とは精神と相互作用をする何かである。この何かを心霊としましうということになる。心霊とは精神と相互作用するを前提とした言葉である。この心霊にしてみれば精神と心霊が相互作用しないというのはあり得ない。

目の前にペンが在つたとする。このペンを心霊と考えれば精神力で動いたり曲がつたりする。精神力で動かなかつたり曲がらなかつたりするほうが不自然になる。ペンが精神力で動かないとするなら心霊という言葉を使うのは間違いということになる。相互作用しないとするなら心霊以外の別の言葉を使わねばなりません。

目の前にペンが在ったとしたら物質としようが心靈としようがペンはペンなのだ。物質が心靈かは、観察者の主観や客観が決めていることでペン自体は何も変わらない。例えば目の前に在るペンが見えて視覚と相互作用して手に取って握めるから心靈とすると、誰かが知らぬ間にペンを部屋隅に片したらペンは感覚に知覚しなくなつたから、そのペンには精神と相互作用しなくなつたから物質であるとするものであろうか。

目の前に在るペンが見えて視覚と相互作用して手に取って握めるから心靈であるとしても、目の前に在るので動け動けと念じても動かないから精神と相互作用しないから物質であると考へても間違いで、例え知らぬ間に片付けられて感覚出来なくなつても在るものは在るのだからそのペンを見つけて触つて手に取つて見れば精神と相互作用するのだから、そのペンは物質なのか心靈なのか判断が付かなくなつてくる。

しかし物体がペンであることには変わりがないとすると精神と相互作用をするのかしないのかは、ペン自体の問題ではなく観察者の主観や客観の相違によることに成る。とするペンには心靈でも在りえるし物質でも在りえる。こうなると心靈ともいえないし物質ともいえない。しかしペンで在ることに変わらぬ。

これはペンが絶対に何時如何なる時も精神と相互作用しないんだと言ひ切れない。ペンが絶対に何時如何なる時も精神と相互作用をするんだと言ひ切れないんだということを現している。どちらにでも精神と相互作用の如何によつて成りえる。主観や客観により精神と相互作用をしたりしなかつたりする。どちらでも有り得るし、どちらでもあり得ないものである。

相互作用の真実

上を指差せば上であつて下ではないであり下を指差せば下であつて上でないになる。上の反対は下であり、下の反対は上である。上と下は正反対だけど方向には違いがない。上だけで下が無い方向、下だけで上の無い方向など感覚できない。

上だけとか下だけなどと言う方向は存在しない。顔を上に上げてても下にしても風景が同じとか、顔を前に向けているのに後頭部のあたりが無くなつていたりとかは、感覚できないのだ。同様に右と左は正反対だけど方向であることに変わりは無い。前と後ろは正反対だけど方向であることに変わりは無い。

熱いと冷たいは正反対だけど温度であることには変わりが無い。熱いものに触る人がぬるいものに触るとぬるいもののほうが熱いものより冷たく感じるが、冷たいものに触る人がぬるいものに触るとぬるいもののほうが暖かく感じる。ある人はぬるいものを冷たいと言ひ、ある人はぬるいものを暖かいということがある。

地球で、太郎さんが北半球の日本にいて、地球の反対側の南半球のブラジルの花子さんと話をする。太郎さんの上は、花子さんの下である。太郎さんの下は、花子さんの上である。丸い地球では裏と表では方向が反対になるからだ。表から見ると上だが、裏から見ると下だ。

ある人にとつて上でも別の人には下だが、ある人にとつて下でも別の人には上である。絶対の一方の方向しかありえない他の方向が無い方向とか、絶対にこの温度が絶対でこの温度と比べると暖かいも冷たいも絶対に無い、この温度だけが暖かいも冷たいも関係ない

とかいう温度は存在しない。主観客観によつてある人にとつての方向や温度が別の人には全く正反対であることもある。

主観や客観によつては方向や温度を同じだと認識しえる。方向や温度を、物質と科学や心霊と宗教に戻して考えて見ると方向も温度も正反対であつても方向や温度であることに変わらぬ。科学と宗教や物質と心霊は正反対であるが精神との相互作用の正順逆の現われに過ぎない。精神との相互作用から見れば二つは同じ物である。精神との相互作用から見れば科学と宗教や物質と心霊は全く同じ物で区別が付かないのである。

物質という名称からすれば心霊と相互作用しないことになつてゐるから、主観や客観によりて心霊と相互作用することも在るとなると、物質という名称では、辻褄が合わない。物質という名称にすれば相互作用しないのみだからだ。心霊という名称からすれば、精神と相互作用をすることになつてゐるから、主観や客観によりて精神と相互作用しないことも在るとなると心霊という名称では辻褄が合わない。

心霊という名称にすれば相互作用をするのみだ。物質という名称では相互作用しないのみだ。上下が正反対でも方向であることには違ひがないように、物質も心霊も正反対の何かであることには違ひない。その何かの名称を生物質量や動植鉱物や想念動力と呼ぶことにしましようとする。

心霊とは生物質量が精神と相互作用する時の生物質量の名称である。物質とは生物質量が精神と相互作用しない時の生物質量の名称であるといふことになる。心霊とは生物質量が物質と相互作用しない時の生物質量の名称である。物質とは生物質量が心霊と相互作用しない時の生物質量の名称であるといふことになる。

場^ば
力^か
の
構^{こう}
造^{ぞう}

時空の構造

時間とは現在過去未来から出来ている。この領域のうち永遠の今が現在である。この現在の時間と同じ空間の領域が力の領域である。空間の領域における永遠の今は、自分の身の回りに限られている。あまりに遠すぎては、見ることも、聞くことも、出来ない。あまりに近すぎて自分で自分の背中が見えないように認識できない。時空間の永遠の今の領域が力であり、その他の領域が場である。

場と力は対称構造になつていて、力にあるものは場にある場にあるものは力にある。場を変える力も変わる、力を変えると場も変わる。力の領域は有限である。その他の領域が無限である。この無限の領域のうち、力にあるものはすべて場にある。力とは無限が詰まつて場になつて現れたものだ。無限の領域には力とも相互作用しない何かがいっぱいある。

しかし永遠の今に生きる我我はすべて源は場にある。これは我我は場に居るしかない。自分の本来あるべき姿に居るとき、無限は力に働きかけ惜しみない援助を与えてくれる。無限の領域は認識しようがないから分からないが、無限の領域のうち場の領域は力にすべて写っているから力を見回すと場が見える。

有限の力を見回して無限の場を見る力に居る生活技法が、場の領域を扱う場の理論である。有限の範囲の力と場を含む無限の範囲を合わせたあらゆるすべては均衡器ともいうべきあらゆるすべてである。この場の領域は、日本語でアマとかサヌキとかカム、漢語で陰陽太極、英語でインヤンジャーとか言われてきた。

我我は、今、ここにいるわけで、その範囲を自分の範囲と言え、その範囲を力とすると自分がそもそもどうやって成立しているかを考えると、自分を成立させる原型になつた何かがあるわけで、実話その領域が場である。自分を突き詰めて行けば力に当たる。力を突き詰めていけば場に当たる。この場に働きかけるには、我我の生活圏で、場に当たる何かと相互作用すればいい。

力は知覚可能だが、場は知覚不可だ。場と力は理解可能だが、場以外の無限は理解不可だ。知覚不可の場をどうやって理解するか、場に在るものは力にあり、力に在るものは場に在る、場は力に現れようとするから、場が力に現れようとする法則に従えば、力を見て場を理解できる。

私達の生活の範囲は、理解できて五感でわかる範囲である。それ以外にあたる、永遠の今の遙か、前や、後や、中間にあり、私達が感覚する空間の中で自分で自分の背中が見えないように、余りに近すぎたりする領域にあり、百億光年先が見えないようにあまりに遠すぎて見えない領域にある、知覚や感覚よりも遙か以前で、認識している時も、認識し終わった以後も在る、永遠の今を支える現在過去未来にもある均衡器がある。

その背後には無限がある。無限とは、有限つまり力で示した永遠の今の対称構造として認識し得る範囲の場の向こう側である。我我有限は、無限がめいはいっぱい詰まった所である。我我の背後には我我と相互作用する場がある。この場は力に現れている。完全に無限となれば有限と相互作用しないから場ではないし力とは関係ない。我我が見えているのは感覚しているのは力の領域である。

場の領域というのは力、以外の領域である。我我が理解できるのは場と力の領域、即ち

場力である。我の理解は場から力に来て場に帰る。力になる以前に存在し力になった間にも存在し、力でなくなつたあとにも存在する。それが場である。力と相互作用している均衡器が場である。力として存在していない根本度量均衡天然造化場力は、我我には数えることも考えることも見ることも触れることも出来ない。場と力は対照になつていて力にあるものは場に必ず在り場にあるものは必ず力にある。

場というのは、有限と無限の間にあり、我我には思い出すことも会うことも、出来ない知覚すら出来ない無限の領域から、我我の解る範囲の有限の範囲と相互作用交換接続する無限である。この相互作用の仕方の特徴がある。その特徴を一言で言えば、共鳴と表田である。その相互作用交換接続性は、根本度量均衡天然造化均衡器が現れるときは必ず表田の共鳴として現れると同時に、表田の共鳴を使うと根本度量均衡天然造化場力が現れる。身の回りの総ては力の背後にある場に由来している。

この場には、力と同じ、粒子性や波動性や相互作用という特性を持つ。力には、場の総てが写っているから、力を見れば場がどうなっているかがわかる。このことは我我の生活に写つていて、日常の生活で力の領域から場の領域に働きかけることが可能なのだ。我我は、理解の範囲である場と力を使い、力から場に働きかけることにより理解の範囲を広げることが出来る。この場は知性生命精神をも制御する物理法則である。

場と力の間には量子の共鳴による循環が働いています。無限から来る量子が詰まつたのが力であります。循環が滞ると場力にタイムラグや誤動作などの誤差が生じます。物事は場力の共鳴であり完全に向かう活動を量子が伝達します。その表れが知性生命精神になります。

我我が見えているのも感覚しているのも力の領域である。場の領域というのは力以外の領域であります。我我が理解出来るのは、場と力の領域、即ち、場力であります。我我の理解は場から力に來て場に歸る力であります。それ以前に存在して力になつた間にも存在して、力でなくなつたあとにも存在する何か、それが場であります。力と相互作用している場は無限の領域の一部で、さらにその一部が力である。従つて場と力は対照になつていて力にあるものは場に必ず在り、場にあるものは必ず力にあります。力と相互作用していない場の領域があります。この場は我我には理解できる範囲外であります。見ることも聞くことも何が存在するかさえイメージすることさえできない。目の前に在つても気づくことさえない。これは場の地平線の向こう側とでも言いましょうか。場や力としては存在していないのでは我我には数えることも考えることも見ることも触れることも出来ない。場の地平線の向こう側は、まさに無限そのものである。場というのは有限と無限の間にある。我我には思い出すことも会うことも出来ない知覚すら出来ない無限の領域から、我我の解る有限の範囲と相互作用交換接続する無限が場であります。身の回りの総ては力の背後にある場に由來している。この場の構成は力の構成と同じで力の量子と同じように場も量子からなり粒子波動相互作用という特性を持つ。力には、場の総てが写つていているから力を見れば場がどうなっているかが解る。このことは我我の生活に写つていて日常の生活で力の領域から場の領域に働きかけることが可能であります。我我は理解の範囲である場と力を使うことで力から場に働きかけることにより理解の範囲を広げることが出来る。

生物質量の自然發生の法則

我我は時空間を界の領域で見ている。当然時空間の背後にある場には界の領域にあるものならずべてある。当然文明も銀河も量子も場にある。人間も場に存在するはずだ。現在世界の領域で起きていることは場の原型を元に鑄造した鑄物だ。量子の振る舞いから人生や星の一生もすべて場の原型が生じたに過ぎない。

時空間から量子が対發生し時空間に量子が対消滅する。量子がトンネル効果や零点振動するときのエネルギーは時空間と量子のエネルギーの決済である。生物質量の考え方からいうと、量子から細胞や個体や無機質や惑星や恒星や衛星に至るまで、すべて生物質量は知性生命精神の現れである。知性生命精神を、實在のあらゆるすべてから切り離し觀念で階層構造化して言葉で定義しようとしても知性生命精神の起源は見えない。今此処の時所が常に新陳代謝を繰り返し若返りつつ時が流れる。

あらゆるすべては時空間よりいである。時空の起こす自然發生であるのだから時空の背後の場に原型がある。そこで知性生命精神もその器の生物質量動植鉉物想念動力も時空間の自然發生よりいであるのだ。

かつて原子物理学の黎明期、原子は波動か粒子かでもめた。だが原子は波動としても振る舞い粒子としての振る舞いもすることが分かった。それ以来、量子も原子も、粒子性や波動性やその相互作用を持ち合わせるかと考えるようになった。電気と磁気は別別のエネルギーと考えられてきたが、統合され電磁力という考えになった。

西洋の科学ではこのように別別と考えられていた存在が統合されることがある。今まで

現代科学は心や命や体はバラバラと考えられてきた、実は体と心は一体であり、量子一個にも心があり命が宿る。体も命も心も実体の現れであり体があれば心も命もある。体も命も心も無関係ではなく場が時空間に現れたのだ。

生物質量は知性の容れ物である、動植鉱物は生命の現れで、想念動力は精神の発動である。知性生命精神があれば生物質量動植鉱物想念動力がある。生物質量動植鉱物想念動力があれば必ず知性生命精神がある。場が力と、命の連鎖反応をするとき、知性生命精神が生物質量動植鉱物想念動力を発生させ生物質量動植鉱物想念動力に知性生命精神が宿る。知性生命精神と生物質量動植鉱物想念動力と相互作用輪廻転生因果応報は同時に自然発生するので。

物質が出来て生命が生まれ精神が生まれ知性を持った人間が生まれ文明文化を築いたという進化論とは違う。何故なら知性生命精神生物質量動植鉱物想念動力が自然発生するのだから天然自然も文化文明も人類も無限の過去から時空を超えて存在してきたからだ。

天然自然が人間を作り人間が文化文明を築いたという順序はない。無限の過去からいつも存在してきたからだ。無限の過去からいつも一緒に存在したからにはどちらが先とも後ともいえない。天然自然も文明文化も知性生命精神生物質量動植鉱物想念動力も無限の広

がり最初から持っていたということだ。
知性生命精神生物質量動植鉱物想念動力相互作用輪廻転生因果応報の自然発生は時間的に無限であると同時に、空間的に無限である。無限の過去から無限の未来に繋がる文明や文化も天然も自然も人類も時間的に無限の存在である。ゼロセンチから無限の彼方まで広がる空間的に無限の存在である。

力の時空間にある、量子一つも一人の間人も都市も惑星や銀河団も、心があり物でもあり、命もある。それは場の時空間の写しであり、完全な場から栄養をもらい老廃物を場に返す命の循環が出来ている。場と力の循環が知性生命精神生物質量動植物想念動力の自然発生を起こす。それは触覚でありタッチとして現れる。

場の時空間でも、やはり天然自然と文化文明は無限から存在する。天然自然も文化文明も原型は場である。力の触覚は場を思考する。それが知性生命精神でありその現われは必ず生物質量動植物想念動力として実体化する。基本的に惑星は人類が生存可能になるように物理法則が組み合され人類が生存可能になる。

天然自然と文化文明は、バラバラではない。統合され創造される。時空間の天然自然と文化文明の橋渡しは知性生命精神生物質量動植物想念動力の自然発生であり場力を考える命の触覚である。人類が場と力の誤差を無くせば場力共鳴をなした人の触覚に量子呼吸が起こり腸脳発電が起きている。

知性生命精神生物質量動植物想念動力の自然発生とは天然自然文化文明等価原理であり場力共鳴量子呼吸腸脳発電からの内部触覚である。場力と異星の間で完全から不完全に情報やエネルギーが循環する。不完全から完全に老廃物は戻り、そこで栄養に戻される。不完全は完全に向かい成長し完全は大完全に向かい成長する。

場力共鳴による時間空間を超えた量子呼吸の腸脳発電が気や経絡秘孔や霊と座というものだ。心霊や物質のことではない。時空を超えた栄養の遣り取りである。量子は零点振動をしてエネルギーがマイナスに成ったりプラスになったりして平均するとプラスである。量子はプラスの時、周りに量子を吐き出す。マイナスの時、量子を吸い込む。量子呼吸で

は量子の噴出口はプラスのエネルギー状態であり吸込口はマイナスのエネルギー状態だ。零点振動のプラスの状態から噴出してマイナスの状態に吸込まれる量子呼吸循環が霊と座である。天然自然と文化文明の等価原理は自然も人間もこの零点振動のプラスとマイナスを作ることである。天然自然が作る零点振動のプラスとマイナスは霊や座である。ところが人間に場力共鳴機構が有っても人体が、人体の霊と座を使わないとプラスとマイナスの零点振動が起きない。

超能力の修行を積んでも超能力が使えない理由は人体の零点振動を使いこなせないからだ。イメージすれば何でも出来る訳ではない。場にあるものが力に現れるのが超能力である。つまり超能力とは腸脳力である。物質の科学が完成すると生物質量の科学が出来る。この超科学こそ科学の本質である。心靈の宗教が完成すると生物質量の宗教が出来る。この超能力こそ宗教の本質である。

かつて先人が超能力を使えたのはこの超科学があつたからだ。霊や座や気や経絡秘孔は腸脳発電システムであり不完全が完全へそして大完全に向かう場力の営みである。偉大な先人は場と一体化すべく生物質量の教えを残す。それが形式化し心靈の宗教や物質の科学が出来た。がだ再び生物質量に帰る。生物質量の自然発生からすれば心靈や物質はない、あるのは実在する無限だ。幽冥界や魔界のような異世界は存在しない。あるのは宇宙文明だ。

天然自然文化文明の等価原理からすれば霊と座は心靈ではなく場の完全完成成分の栄養を含んだ力にある物である。肺で酸素と二酸化炭素を交換するように座で栄養と老廃物を交換し霊になる。しかしヘモグロビンが変わらないように力と場自身も変わらない。酸素

と二酸化炭素を交換しても肺から血がでないように座で時空に穴が開いて時空の構造が壊れたりしない。

内部触覚で探っていくと、表田に噴出してくる場合がある。それが共鳴だ。内部触覚の記憶から共鳴があるかないか、つまり場にあるかないかが分かる。超能力や超科学は場に有る進んだものが力に現れた物である。

自然は動植鉱物

心靈を扱うのは宗教であり、物質を扱うのは科学である。生物質量動植鉱物を扱うのは知性生命精神である。宗教とは、最初天才が述べた場のご意向だ。お天道様はいつも見ているとか、正直しなさいとか言ったのが、弟子が救い主様を信ぜよとか、神が仰るにはとにかくに成り、それが蓄積されて教義が出来て、宗教団体が出来て、戒律を治め、拝礼施設が出来て、お布施をして、団体の団をもり立てるようになる。トップは団体を維持し大きくするためにトップになり、教義を見て元の間を顧みない。

不完全な科学は経験を蓄積し解析し学習しデータベースを構築し実現のために推敲するが、不完全な科学が見ているのは、条件に適合した結果だけだ。それ以外は排除だ。つまり目的を実現するための条件を推敲し、例外的条件を抹消することで目的を実現する純粋な条件や理論だけを探そうとする。これは、あらゆるすべての環境である今此処での時所は宇宙の地平線の向こう側から体温や触覚や匂いまで、実在するあらゆるすべての要素を出来るだけ無視した条件のもとで構築されている。

科学や宗教がその発展の必然として情報を蓄積し検索しデータベース化して理論や教義を構築する。そこで科学的真理的宗教的原理の樹立を成さんと天才たちが挑んできたがこことごく失敗してきた。地球が停滞して完成完全期に移行出来ない理由だ。地球が宇宙に通用する水準に達すれば、完全完成期に移行するが地球人が水準を引き上げられ無い、この壁の正体とは相反するもの同士を両立しようとするから生じる言葉の問題だ。

抑も、精神と相互作用しないと定義した物質と、相互作用すると定義した心霊は相反する。ハンドルを左右に切れといわれたらどうする。右に切ったら左に切ったことにはならん。左に切ったら右に切ったことに成らん。車のハンドルを握り、高速の上で握った手を上下に動かすか。そんなことしたら大事故だ。

上下一緒という感覚は理解出来ない。口と肛門が一緒とか、頭の天辺と爪先が同じ感覚は理解出来ない。これは言葉の表現の上にしか存在しない。漫画や映画と同じで何でもありの表現は出来ても実在しない。磯野家や野比家の現住所は、長谷川町子や藤子不二夫でさえ特定できん。

あらゆるすべてと言つても、実際には小説や漫画のように何でも有りではない。言葉や映像で表現可能でも作品がすべて実現しない。出来つこない何でも有りの観念のあらゆるすべてと存在に裏付けられた今此処のあらゆるすべてがある。あらゆるすべてと言つてもあらゆるすべてと言つている言葉に過ぎない。言つた瞬間にそれ自体で過ぎ去つた過去の言葉に過ぎない。

心霊も宗教も物質も科学も完全に完成した本質は動植鉱物で本来は同じだが、宗教団体の団や科学の殿堂が、各自が決めた互いに性格が正反対の教義や論理の対症療法階層構造

を掲げ、互いに一步も譲らない。心靈は知性生命精神と相互作用しないを排除するし物質は相互作用するを排除する。例外を排除するからあらゆるすべてを扱えない。生物質量は共鳴を起こし、場力を結ぶ基本原理故に、あらゆるすべてを扱える。

場の領域は動植鉱物の音階であり階層構造の音階ではない。あらゆるすべてはあらゆるすべてと表現してもあらゆるすべてではない。見えも触れもしない時空間の背後の確かにある場には、我我が場の領域の音階の周波数に同調するしかない。場の固有の周波数が、八十八生物質量ヘルツなら、我我が二十二生物質量ヘルツでも、六十六生物質量ヘルツでも場と共鳴しない。

対症療法の音階を、どうチューニングしても生物質量と響き合うことはない。階層構造では場力共鳴が起きないのだ。当然、対症療法の発想では、動植鉱物の時空間の背後の場が、時空間を越えて力と共鳴するという発想は無い。縄文の終焉以降の世界観は場力と星の交流を否定するようになった。場力と星の交流を否定する山河草木の終末の今の宇宙観は、熱力学的平衡の死や、宇宙が破裂して終わるとか、縮んで終わるとか言われている。宇宙が完全と誤差がないように向かって行くという考えは、エントロピー増大の法則の熱力学の第二法則にはない。山河草木の終末の時の今の物理学の宇宙観では、宇宙をフラスコやビーカーのように完全に密閉された閉鎖系のように考えている。実際には無は場である。ビツクバンでエネルギーの固まりのストロンチウムが出来て、宇宙の晴れ上がりでコンチニウムになった。これらの間にはまったく何の相互作用がないのではない。完全な閉鎖系に成ってはいない。

時空の間を共鳴を通してつながっている。完全な場に相似するとき、共鳴が起こる。そ

うすると、知性生命精神が自分自身に由来する理想的に完全無欠の真善美愛を生物質量で生命幾何学する時、無限が噴出してくる。ありとあらゆる動植鉱物は潤いを醸し、艶やかに舞う。すべては幸福になる。それが宇宙の場力と星から星への往来である。

従って宇宙の物理構造は人間が自然をかき乱さず、人間が自然と場力と星の共鳴を為し得る限り、熱力学的平衡はない。人類が天然を掻き乱し、場力共鳴を遮断し、狂わさない限り、エントロピーの増大は本来、宇宙には存在しない。

熱力学の第二法則に基づいた今の宇宙論は、実在する有限の物質の宇宙論である。それは山河草木の時代の終末の時の階層構造や対症療法の宇宙観であり、宇宙は機械仕掛けの部品であり、組み合わせて出来ているのだという宇宙論であり、機械のように部品を交換すればいいという考え方が、外科手術の臓器移植や、試験管の遺伝子操作の元になる。

すべては時空の背後の場に本体があり、場、本来の有様に帰るのが大本である。キャラクタが、コピーやペーストであつては、自分自身ではなくなる、オリジナルではない。

天然は生物質量

免疫システムにおいて、キャラクターがオリジナルそのものであることなのだ。キャラクターがオリジナルでないコピーなら免疫システムは拒否する。これはキャラクター自体が時空の場に根ざしているからだ。デオキシリボ核酸は場と力の遣り取りをする最小単位だ。遺伝情報自体は場にある時空の共鳴が遺伝エネルギーだ。場と力が完全と誤差がない時、共鳴が場の遺伝情報を力に伝える遺伝エネルギーを発生させる。力に伝えられた遺伝

エネルギーが形態として現れたのがデオキシリボ核酸だ。

心霊も物質も教義や理論で今此処で測定してもその時点で過ぎ去りし過去だ。無限から時空間の濾過が極まる永遠の今を越えて無限に抜ける共鳴でないとあらゆるすべては扱えない。天才彫刻家が大理石に触れた時に閃くのは、天才料理人が素材に触れた時に閃くのは、全体と同調するからだ。

円で例えれば円を描きその円周に近づけば近づくほど、全体に似ているとする。離れれば離れるほど全体に似ていないとする。円周の内側に入ってしまえば、全体の姿より全体の姿に似ている。円の中心に近づけば近づくほど、本来あるべき姿になっていく。円周の内側に入れば、場力共鳴が起こり、中心に近づくほど共鳴は激しくなつて無限に強くなり中心に無限大に収束すれば共鳴は臨界に達する。

時空間にも健康と不健康があり、健全と不健全がある。当然免疫系がある一方で病原体もある。時空間を健全に保てばフィルターは健康であるが、不健全ではフィルターが働かない。天然を磨滅し時空間を不健康にしてしまえば、我我は時空間病原体に汚染される。時空間免疫系は生物質量の自然発生が健全であることだ。

時空間に固有の形がないように時空間病原体にも固有の形は無い。時空間病原体の介入を防ぐ手立てではない。どんなものにもでも介入してくる。時空間が健康ならば時空間免疫システムは健康であり、時空間を守るから時空間は病気になる。しかし、人類が場に無い物を作る時、天然は乱れ、時空間が不健康になり、衰弱する。そうすると、時空間が病に冒される。そうすると、環境が悪化し、人心が荒廃して行く。

知性生命精神には実体が無く、見えもしない、触れも出来ず、匂いもしない、固有な形

ではない。しかし生物質量を知性生命精神の実体として認識する。知性生命精神の実体として認識しているのは動植鉱物である。生物質量や動植鉱物や想念動力はあらゆる実体をあらわす総称でもある。

知性生命精神と対応する触媒金属元素としての生物質量に元素転換する時は場が時空間のフィルターを通して場を濾過し、動植鉱物を力に濾しだし場が生物質量を自然発生させる。時空間の濾過機能は天然にあるものしか濾過しない。場にある文明は時空間のフィルターで出ている。あらゆるすべては時空間の因果律で守り育てられる。時空間には我我に必要を運び不要を取り除いてくれる濾過作用がある。

時空間の新陳代謝を高め、若返り、良質の生物質量を、分泌してもらうには、どうしても界の領域の我我が必要になる。界の領域で知性生命精神を発揮し文明を築くのは我我だから、どうしても我我は時空間の健康を保つ必要がある。文明の利器が時空間を健康にするには文明の基盤が生物質量動植鉱物の自然発生に根ざしていればよい。

人間も濾過機能がある。人間が生物質量を生産し天然である限り文明や文化が発展しても環境破壊は本来おきない。しかし階層構造の国家や組織の規則を決め、隷属させる仕方では、天然に無いものを作り出そうとするから環境破壊や戦争や飢餓や疫病や貧困や無知が起る。本来虚悪醜憎というものは人間が作り出さない限り天然には無い。

天然に無いものを作り出そうと国家権力や国際組織が苦心賛嘆してもするだけ無駄だ。動植鉱物は天然の中にしか現れないということは、知性生命精神生物質量が自然発生すれば天然だ。文明文化を駆使し生物質量が発生すればその文明文化自体も天然なのだ。人工でありながら自然である。

現在の地球は対症療法階層構造が主流だ。例えばお金。お金は貧者から富豪に集まる。少数の大富豪が多く、貧乏人から富を搾取する。お金は大富豪のご意向で動く。持てる者と持たざる者の格差は拡大し続ける。当然、トップは体制を維持するために管理できない例外を排除する。対症療法階層構造は決して表に出ることが無い強大なパワーで組織を裏から操り、組織を守るために戦うことを厭わない対症療法階層構造の最終形態の別室制度を生み出す。階層構造と対症療法を排除する生物質量動植物はまづ先に禁止される。未完成不完全期の惑星の最終形態の特徴たる、決して表に出ることがない裏で糸を引く別室制度が起こり、やがて残り少なくなつた天然を巡り別室同志の争いが起こる。そこで世界最終戦争で決着を付けようということに成り自滅する。だがそれは天然に違反するからだ。生物質量動植物ではそんなことは起きない。

家のノブも、本来、場に本体がある。当然、それは場にありとあらゆる家のノブがあるはずで、最高最善を追求しても幾らでも至高のノブを追求できる。これで完全というノブを創作しても、それを超えて行くことが出来るからだ。陶芸家が土に触れた時、天啓が閃くのも、場の原型に共鳴し、場の本体から完全なるそのものの情報が伝わり、共鳴がエネルギーとして発生し形態形成力として発動するからだ。

生物質量動植物概念動力は、場の本体の遺伝情報が、遺伝エネルギーとして、力に逆り出たそのものであり、時空から抜けた量子が、超銀河団から時空に抜ける、その統べる生物質量動植物は本来、場の本体の遺伝情報が、遺伝エネルギーとして、力に逆り出たそのものであるべきだ。

人類の起源、生命の起源、文明の起源

場から形の界の力に生まれ変わり、今此処で若返りつつある新陳代謝は、知性生命精神と生物質量を自然発生させている。それは生命だけでなく文明や文化も新陳代謝をする。時空間には知性生命精神動植物を自然発生する条件が満たされるように、環境を組み合わせて調和させる作用がある。宇宙はこの星も地球と似通った自然環境で、生き物も皆、似たり寄ったりだ。人類同士なら結婚して子も残せる。

宇宙には人類の生存に適した太陽系が常に生まれつつある。古くなった太陽系から新しい太陽系への引越は日常化し常に新天地は解放されている。惑星が出来て生命が生まれ進化しても天然が進化するのには原人とか類人猿とか猿人とか呼ばれるまでだ。彼らは、朴訥であるが自分で文明を築くほどの能力はない。

もし星から星に移民してきたなら移民が始まった最初の惑星へ何処から人類は来たか。もし人類の起源が時空間の背後の場にまで遡るなら力の人類は一生を終えても場の自分に残り新たに生まれ変わる。すると遡っていつて宇宙開闢の時に行き着いたら人類と宇宙ではどちらが古い。時空間の背後にある場に文明や文化や人類の起源があるなら、そもそも人類はどこから来たか。

場の領域の我が祖先が場の文明で今から三千年前に開闢して我等の宇宙が開いた。場の文明を一式揃えて大船団で場から力にやって来て入植していった。では、場の文明や人類はどこから来たか。それは場の原型になった場から来た。その場も元になった場から来たはずだ。しかし、三千年光年ある我が力の宇宙でさえ隈無く探査出来ないのに

場を蘊蓄するのは止そう。

我等が地球も祖先は、他之の天体から移住してきた。時空間の法則は宇宙の環境を人類の生存に適したように組み合わせ最適な環境を作る。どこの星でも地球と似たような環境になる。惑星が出来て生命が生まれ進化していく。天然が作るのは猿人とか類人猿とか原人と言われている迄だ。彼らは木訥で在るが文明を築くまでの能力はない。宇宙文明は彼らが発生し生活出来るようになった星を見つけると、人類が生息可能な星になったと判断し志願者を募り植民を開始する。植民が開始され人類は生息圏を超銀河団全体にまで拡大した。

植民が開始された惑星では進んだ文明の英知で原人たちを人類に進化させ混血が進む。人類の起源には、場の起源と力の起源の二通りがあるが、混血が進み差はなくなっている。初めから文明を場から一式持つて来た。その文明が宇宙文明の基本となる。その文明は、当然地球にも伝わっている。

それが形式化骸化して心靈と物質になった。幽冥界にいる神とは元元は移民の元になった場の文明や、力に移民して超銀河団に広まっていた宇宙開拓者の宇宙ネットワーク文明だ。今は心靈界を示す隠世という語は本来は場の時空文明で、今は物質界を示す顕世は本来は力の宇宙文明である。今は心靈界を示すあの世は、本来は、力の宇宙文明で、今は物質界を示すこの世は本来は今いる天体を示すのだ。

地球上で二億三千万年前に最初に植民を開始した人類を時照愛人という。しかし地球の環境は安定せず大災害に見舞われ宇宙に避難することもしばしばあった。そこで時照愛人の本体は環境が安定していた月に移住し少数が地球の開拓のために地球に残った。

地球はこの太陽系で最も初めに植民が開始された惑星の一つでありながら三十五万年前の段階では、月のほうが開発が進み、地球は最も開発の遅れた未開の惑星になっていた。太陽系宇宙連合は宇宙文明に適合出来ない連合の人人を、未だに宇宙文明の水準に達していない人人がその当時最も多かった地球に移住させ、地球人と一緒に水準に達するよう指導した。太陽系宇宙連合の援助の元この計画は進められ現在に至る。

天然自然の中にある文明文化が時空間の中に完全完成しているのだからただ単に使えばよい。当然、場の文明は力の文明の我我に場の存在に気づき場が故郷であると気づいてほしいから、場は我我に生物質量の製造を通して働きかけて「時空間のフィルターがある、その背後には、場の我我が貴方たちを守っていますよ、創造と正義とはこのようにして、物理法則で証明されますよ」というシグナルを送る。

我我はそれを学習し「いづれは単立つ時がくる。時空間のフィルターを使わねば天然は作れない。天然に無いものを作れば維持するためムリムダムラに天然を消費する。異星人は目先の利益の高笑いより生物質量動植鉱物の快適さを選んだ。

地球の民は皆階層構造に反対したが、何故か時照愛人の指導者は月でさえできつこない階層構造を強引に押し進め民衆の不満が炸裂し、三十五万年前には大洪水が一万二千年前には大戦争が起こった。他の異星人に指導者の地位を奪われた時照愛人の指導者は復活を預言し失脚した。時照愛人の対症療法政策が地球で、不完全未定期が長引く原因になった。

霊界物語は、その名の通り、地球の心霊界とこの世の話であり、霊主体従から始まり、山河草木に抜ける。そしてそれは二度目の天之岩戸開きで天祥地瑞に帰る。かつて起きた

大天災大人災の型をどうするか。それが未編纂の三十九巻の正念場だ。靈界物語がもとの場と力と星から星への天祥地瑞に帰れるかどうかはあの世とこの世が星から星へ、であり隠世と顕世が場と力である物語を編纂できるにかかつている。

天祥地瑞と縄文時代が場と力と星の真相の時代であつたのだから靈主体従から山河草木を抜けて、場力と星を守り調和し連動する八尋殿とヒヒロカネに、我々が帰るかどうかに、かかつている。三五教が、八王八頭と神宝を抜けて、八尋殿とヒヒロカネに帰ればウラル教もバラモン教も、八王をやめる。やめればウラナイ教も、八尋殿とヒヒロカネに帰る。そうすれば二度目の天之岩戸開きの、黄泉比良坂の戦いが、大天災大人災である必要がない。

生物質量の構成

火水の御用のエリア88は、八尋殿のミトロカエシの動力源である。火水の御用のエリア88を行うことでヒヒロカネの品質が決まる。行動としての火水の御用のエリア88は量子呼吸を起こす生物質量をミトロカエシが産み出すことである。

表田のアザムの言葉の生物質量を鍛えることは中身を鍛えることで、表田のエリア88で行動の生物質量を鍛えることは、器を鍛えることである。生産流通消費再生の各段階で言行一致の生物質量を鍛えることは生物質量の相互作用を鍛えることである。

実在する実物が完全無欠との誤差が無いということは実物を構成する量子が。場そのものの噴出口であり、力そのものが吸込口に成っていることである。構成された素粒子が、

量子呼吸を起こしているということだ。

量子一個でも場と連動する。それが何で在れ純粹な生物質量であれば天然自然と誤差が無いことに成る。完全に理想的な生物質量は時空間の象徴そのものである。理想的に完全な生物質量であるなら周囲のすべてを森羅万象と誤差をなくす強力な触媒差用を持つ。

生物質量を練磨し鍛えていくことが古代社会の言霊であった。実体としての言霊と概念としての言霊の純度を上げていくことであつた。概念としての言霊とは、訓読みの仮名の四八音の響きを最高の比の和を以て表田のアザムに練り上げた、文歌調の五七調の歌である。言葉としての生物質量はまさにこれで、人類の思索の宝庫である。それはホツマツタエやウエツフミやカタカムナそのものである。

物質といおうが神霊といおうが、あるもの自体は同じ物である。ただ人間が神霊だとか物質だとかいつているだけだ。生物質量では神霊や物質も基本的に知性生命精神の中身と生物質量の器と、両者結びつける相互作用の構成の三点セットで出来ている。

日常生活で突然、家が消滅したりしないのは家を構成する量子が存在の形態を維持できるからだ。量子は存在しているだけで零点振動したり光子を吐出したり吸込んだりしているからエネルギーを常に消費しているが、燃料切れに成つて零点振動が停止したり光子を吐出するのが止まつたり吸込むのが止まつたり波動性や粒子性や相互作用が停止しない。何故かそれは量子が波動性や粒子性や相互作用の維持に必要な情報やエネルギーを時空間から供給されているからだ。

器が量子で中身が言霊でその相互作用の三点セットであるならば、器の量子の波動性は中身の言霊の響子、器の量子の粒子性は中身の言霊の写子、器の量子の相互作用は中身の

言霊の結子である。

物質から生命が生じるのではなく、物質と知性と生命と精神は基本的に同時に存在し、形態の現れ方の相違に過ぎない。当然、物質として存在しているものは物質として存在しているであつても生命や精神として現れてはいない。精神や生命として存在していない物質をどうやっても生命や精神には成らない。だから物質から生命や精神は作りだせない。存在の形態を物質から知性や生命や精神に変更すれば知性や生命や精神になる。波動性や粒子性や相互作用として現れた形態を響子や写子や結子の形態に変更すればよいということだ。生物質量の量子が三つの特性を維持し消滅しないのは時空間から供給をうけているからだ。生物質量の知性生命精神が消滅せず、寝たり起きたり出来るのは言霊の三つの特性を時空間から供給されているからだ。

物質が生命に成るといつてもマネキン人形が人間に成つたり紙に画いた植物が紙から生えてくるということではない。生命といつても普通の普段の生命である。ここである物質から生命になる生命の自然発生とは普通の生命の発生である。

固体の泥や気体のガスが液体に溶けた固相液相気相の三つの相が溶けた状態が在る条件を満たせば細胞を持った生命になり、神経細胞の内部でこの条件を満たせば神経細胞は、半導体化し発電素子と成り、今まで使われていなかった知性生命精神が自然発生し物質が常温常圧で元素転換する。

生物質量せいぶつしつりようについて

完全完成確定性原理

実在としての形態はすべて天然自然の裏づけがある。物質ではすべては天然自然の偶然と妥協の産物である。何かある。科学者はそれが何故そうなったかを考える。そうするとそれは天然自然の妥協の産物である。何故、妥協したか。それは偶然そうなった。何故、偶然が生じたか。それは妥協の産物である、という。

そこに法則が在ると考えるのはたまたまそうなったに過ぎないのだという。人間が法則を思考してもそれは人間がそうだと決めたに過ぎない。こうだと決めてもその決めた法則が絶対の真理であると人間に証明できない。完全無欠を証明できない以上完全は存在しないという。こういうのを不完全性原理という。

だがそれは完全を人間が証明できないということであつて、完全が存在しないことには成らない。実在する完全は完全なるが故に完全を誤ることがない。完全は完全なるが故に完全を完全に完全が証明できるのだ。完全は完全なるが故に完全を完全に完全する。

しかし人間は不完全未完成である。故に完全完成には成れない。しかし完全完成と似ることは出来る。人間は相似することが出来る。それは人間が完全無欠と相似出来るということだ。このことを完全完成確定性原理ということにする。

実在する完全無欠とは何だろう。それは実在である。今居る所もそこいらじゅうが実在である。今ここが完全無欠でなければ今ここに居るはずがない。無限の過去から今居る所が完全無欠であるから今ここに居られるのである。不完全なら今ここはない。即ち時空間こそ全知全能にして完全無欠である。森羅万象は完全完成であり万能である。

森羅万象は実在する無限からの因果律に外れない。完全完成であり万能である全知全能にして完全無欠は、実在に拘束される。実在する無限からの因果律の因果は完全無欠が、一個しかないで、それ以外は全く無い。完全無欠は一個しか実在せず完全無欠の選択肢が複数あることはない。

実在する無限は無限の歴史を保有しあらゆる可能性を包含する。実在する無限は無限の可能性に無限の歴史との整合性を与え秩序化する。実在する無限はすべてに無限との歴史に関連付けを与え今居る所に実現化する。偶然や妥協は実在しない。あらゆるすべては、無限の可能性と無限の歴史との因果律である。

無限の歴史と無限の可能性を繋ぐ因果律は完全無欠であり不完全未完成はない。最も正しいのである。最も正しいとは最も強く最も美しいである。

時空間は完全無欠である。それは最も正しい正直である。最も正しいというからには、基本的人権の尊重にして公共の福祉の実現である。ということは天然自然と誤差がないとは、基本的人権を尊重し公共の福祉の実現をするということである。完全無欠と誤差がないとは、人類が時空間と共鳴することである。それは火水の御用のエリア88である。ということとは火水の御用のエリア88を描く時、最も注意せねば成らないことは公共の福祉の実現や基本的人権の尊重のためにエリア88を描くことである。

人類が完全完成確定性原理を見失い、不完全性原理を濫蓄しているということは、まさに末法の世である。進化とは偶然と妥協の産物にして、天然天則に意図はないということ自体、天然天則から外れている。人類が不完全だから天然天則が不完全、人類が未完成だから天然自然が未完成だと誰にいえる。誰にもいえない。

完全無欠が完全無欠だと誰にいえる。誰にもいえない。しかし、人類は森羅万象と誤差をなくすることは出来る。人類が天然自然の中の人類の原型と誤差が無いとき人類は、完全無欠と一体化する。その時、人類は完全完成成分を取入れ、不完全未完成成分を吐出す。人類が公共の福祉や基本的人権を尊重し最高の比の和を持って調和政策を實踐すると人類は史上最強なのだ。

戦う人類は強くない。何故なら完全なる存在と懸け離れるからだ。弱い人類は路頭に迷い、詐欺や強盗や強姦を始め、朽ち果ててしまう。和を持って調和する人は争う疑い深い弱い人類に対し、完全完成確定性原理を説くことが出来る。争い、騙し、損をさせ上前をはねるのは弱い人間のやることだ。強いとは正しいことである。それは正直である。つまり善い人間である。良心が健全なら必ず森羅万象と誤差がないに気付く。最高の比の和を持つて尊しとなす完全完成確定性原理を樹立するからだ。

時空間が完全無欠である。完全なものとは存在しないというのは概念上の話であり実在ではない。実際にある時空間が不完全か。完全そのものではないか。天然自然や進化が偶然と妥協で出来ているというのは誰が決めた。人間が決めたのではないか。

天然自然や進化が、偶然と妥協の産物であると決めたのは人間だから、不完全性原理は人間が決めた天然自然や進化が偶然と妥協の産物であるという結論を証明できないということである。完全とは存在しないと決めたのは人間だから完全とは存在しないという結論自体が不完全である。従つて天然自然が完全であると人間が決めた結論自体も不完全である。

しかし実在は完全であるとは判断しようがない。無限が完全でないならこの世はとつとくに崩壊したはずだ。実在が無限の過去から完全無欠であるから、今ここに居るのではな

かろうか。今ここに居ること自体が完全無欠であるという証明ではなからうか。

完全完成確定性原理は不完全性原理や不確定性原理を超えている。実在する無限は人間の意図を超えている。しかし完全完成確定性原理は無限の可能性と無限の歴史を今居る所で結び、知性生命精神生物質量動植物想念動力相互作用輪廻転生因果応報の自然発生として実現する。

無限の過去の蓄積が無限の可能性の中から未来を生み出す。無限の可能性の中から生み出される今居る所は無限の過去からの必然である。過去と未来には整合性がある。未来には何が起こるか分からない。しかし無秩序ではない。無限の過去が未来に起こることに、秩序を与えるのだ。

人間に出来ることは、実在する無限、即ち無限の過去からの繋がり、つまり場の原型と寸分違わぬ、つまり場力に誤差を作らないことであり、最も正しい発心を選択することである。

生物質量は知性生命精神との相互作用を前提としている。知性生命精神は必要を選択し不要を排除するから、知性生命精神は必ず真善美愛を選択し虚悪醜憎を排除する。自然界では腹が減ったら飯を食べ満腹したら食べない。過食症のライオンとか拒食症の象とかはいない。しかし人間界では過食症や拒食症が実在する。自然界には無いものが人間界に在るのは何故か。自然界と人間界の何が違うのか。

自然界の需要と供給の結節点とは、即ち正直である。森羅万象を司る偉大な物理法則と直結している。正直に従う。自ら外れることはしない。人間界は外れることがある。この暴走したのが過食症や拒食症や戦争や貧困である。これらは自然界で動植物たちが何気

なくしている、生物質量の真善美愛を選択し、虚悪醜憎を排除し、必要を選択し、不要を排除する当たり前の想念動力が、人間界には無くなっているということだ。

時空の構造に従い、完成に向かうように揺らぎながら主従順逆の関係がある。虚悪醜憎が中心で真善美愛が従うとか、真善美愛と虚悪醜憎が拮抗しているとか、必要を排除不要を選択とか、必要も不要も選択とか、必要も不要も排除とかは自然界には無い。しかし、人間界には在る。本来なら真善美愛が中心で、それに虚悪醜憎が従う。必要選択不要排除だけでなければならぬ。人間界には生物質量と相互作用する知性生命精神が動植鉱物と、最適化する何かが必要であり、それが常に最適化しつづける必要が在る。

科学と宗教も物質と神霊も動植鉱物なんだから常に生物質量のもとに、連続化率を上げ断片化率を下げ最適を保ち戦争や貧困や過食症や拒食症を起こす知性の暴走を食止める。科学と宗教も物質と神霊も常に調和を保ち、主観客観の相違に過ぎないのだから基準が同じ方向や温度の例えと同じように元が同じなら、同じなんだから科学と宗教、物質と神霊は、知性生命精神が生物質量と最適化する何かが必要であり常に最適化しつづける必要が在る。

この何かが生物質量動植鉱物想念動力の本来の姿である。知性生命精神が真善美愛に従い、虚悪醜憎を従わせ、必要選択不要排除で連続化して断片化しない相互作用をする何か及びその状態にあり、保ち続けることである。これが場力と星から星へである。森羅万象は偶然と妥協の産物では無い。力に起きたことはすべて場に鑄型がある。力にあるものも場の鑄型に向かう。力ではどういうふうに作用するか分からないが結果的に場の因果の通りになる。それが完全完成確定性原理である。

今まで命と心と体は別と考えられてきたが、生物質量では同じ実在する無限に源を發し現れ方が違うだけだ。そこで等価原理や交換接續性がある。物質が出来て生命が生まれて精神が生まれ知性が生まれたというのではない。量子一個一個にも心があり命があり体もある。生物質量では時空間から量子、細胞、個体、家や都市、大陸や惑星や超銀河団もすべて命と心と体がある。すべては場の原型から生じ場に帰るといふことだ。

生物質量は体の作用が強く出ればある時は物として現れ、心の作用が強くであればある時は知性を持ち、命の作用が強く出れば生命として現れる。当然コンピュータの中の信号として処理されるデータも場力共鳴の大きいなる循環に從うなら量子が意志を持ち、当然基盤の配線の中を流れる量子を自由にすれば、場の采配の通りに動くことになる。

言葉としても実物としても生物質量であるならば、同じであるから人間の活動も自然の活動も生物質量の観点からすれば同じ実在する無限の現れに過ぎない。生物質量の定義からすれば人間の活動も自然の活動の生物質量に統合される。

仏陀やジーザスの時代の宗教は信心することはお布施が当たり前であつた。信じる者は救われると説き、救いがないのは信心が足りないからで信心のためにお布施をすることだといふのが当たり前であつた。ジーザスや仏陀はそれはおかしいと感じ、旅をしたり修行を積んで場力と異星の真実に気がついて、そのことを民に説くが当時の権威は否定した。その後、弟子たちはジーザスや仏陀の場力と異星の真実を否定しジーザスや仏陀を否定した権威と同じ過ちを犯す組織に成つた。

そこで概念の心霊を否定し物質の西洋科学が興る。近代合理主義はジーザスや仏陀が説いた場力と異星の世界観を否定した当時の権威と同じである。学会や委員会のいつている

ことがジーザスや仏陀を否定した当時の権威の主張である。生物質量では奇跡が起こせても、心霊や物質では奇蹟が起こせないからだ。

西洋思想こそが古の賢者明哲が間違えたとしたものであり、東洋思想も、やはり間違っている。だが、当時からそうだったようにいつの時代にも場力と星の真実に気が付く者がある。そういうた者は活動してきた。

賢者明哲や良の金神を否定した権威は心霊や物質を説く。権威は実在しない概念や実在する有限を持ち出し、歴代の賢者明哲や良の金神の場力と異星の真実を否定する。つまり今も昔も権威は初めから歴代の賢者明哲や良の金神の世界を歪曲している。権威は場力と異星の真実が理解できないのだ。

心霊の権威が生物質量を批判する内容や物質の権威が生物質量を批判する内容こそ良の金神や賢者明哲が間違えたと警告した内容そのものだ。従って現在の科学や宗教の状況を省みるに、古の賢者明哲の時代と何ら変わりはない。現在の科学者や宗教家がいう世界観は場力と異星の真実を否定したのだから天祥地瑞の時代や縄文時代や宇宙創生から続く場力と異星の真実とは何ら関係がない。

従って科学や宗教の物質や心霊を掲げる科学者や宗教家が生物質量を蘊蓄しても、定義それ自体が異なるのだから外的蘊蓄である。宗教家や科学者が生物質量を正しく定義して生物質量の定義を蘊蓄するのならば、合点がいくだろう。

生物質量という発心を現在の視点から再構築してみるとどうなるだろうか。例えば歴代の賢者明哲や良の金神が様々な超能力を発揮したという。現在の賢者明哲や良の金神も、やはり超能力が使える。そこで考えるに、なぜ今の宗教家には超能力が使えないのか。それ

は靈や座が使えないからだ。賢者明哲や良の金神は八尋殿が使えたしヒビロカネを合成できたが、現在の科学者はアルケミーやテオクラシーを認めない。

現在の宗教家は東洋思想を説き、科学者は西洋思想を説いている。東洋思想や宗教家は神の存在を証明できないし西洋思想や科学者は物質や生命を定義できない。人間を超えた存在に対し態度を明確にしていない。人間がこうだと定義を決めてもそれを超えて動く、人間が全く歯が立たないあらゆるすべてを、現在の人類は定義することも出来ず、従わせることも出来ず、かといつて上手くつきあう方法も見つけられずにいる。

予測不可の存在に対し全く対処できないのだ。人間がこうだと決めたから、こうであるなら、こうだと定義できても、人知を超えた要素があれば全く対処できない。それが、不確定性原理や不完全性原理の根源である。人間の定義したことを超えた存在を定義出来ないのだろうか。

信じる者は救われるから救いがないのは信心が足りない、信ぜよという宗教家は、教義の定義さえ超え、宗教家の意思を遥かに超え宗教家の意識を発生させる根源さえ超えてしまふ神を扱いかね、最もらしい蘊蓄しか出来ない。科学者も同様に科学者の意図を超えた存在やあらゆるすべてを支える根源の存在を前に、途方にくれているのが現状である。

この問題を解決出来ない者が權威に胡座をかく者になり、解決出来た者が賢者明哲や良の金神になる。靈や座の超能力や八尋殿とヒビロカネの超科学は未発見の未知に完全に対応できることなのだ。人知の根源であり人知を超えた存在の援助こそ超能力、超科学の根源である。

当時や現在の宗教家や科学者が教義や法則を超絶した存在やその根源を異端とし排除し

た。教義や法則の中で信心し研究することが尊いとしたが、実際には權威に胡座をかい
ばかりで、なんか変だと思つたその中から眞実を確かめようという者がいて、その中から
賢者明哲や良の金神が発生する。

人知の根源の向こう側や遙かに超えた存在である教義や法則の範圍外の存在は、宗教家
のいうように異端であり科学者のいう偶然や妥協の産物であらうか。科学者や宗教家のい
うような人間を超えた意志があるかないかという問題提議は、神なるものがあるのかとい
う問題である。

それは科学者や宗教家が時空の構造に気がついていないから、そう考えるのだ。心霊や
物質という言葉が現れる前の時代は生物質量であつた。生物質量がバラバラになつて心霊
や物質が現れた。当時も今も科学者や宗教家がいう神なるものはそれは考え違いをしてい
る。心霊を証明できない宗教家をみて、科学者は神なるものはいない、物質の偶然と妥協
の産物で出来ているという。人知を超えた英知を認めない。

だから霊や座の超能力や八尋殿とヒイロカネの超科学が分らない。不確定性原理や
不完全性原理がいうように、完全無欠なんてものはない。すべては偶然と妥協の産物であ
るという。異議があるなら神の存在を証明してみろということになる。アイアンからゴー
ルドを作ってみろという。超能力はこれだとして出してみろということだ。

縄文時代は天然自然のもので出来ていた。人工部品で作られた原子炉や加速器は発見さ
れていない。天祥地瑞の写しの縄文時代が、神聖政治鍊金術超能力超科学文明であるなら
ば当然、元素転換を起こす原子炉は、天然自然のもので出来ていたということになる。
縄文時代の鍊金術は豊かな自然環境の中で天然を豊かにすること、そのものであつたとい

うことだ。先史の時代では豊かな自然環境をもちいた錬金術でヒヒロカネを生産した。八尋殿やヒヒロカネは豊かな天然自然そのものである。

先人が行なつた奇跡は先史の時代の生物質量を使つたのだ。生物質量は天然自然と誤差がないのである。それは場力共鳴だ。完全完成成分を撰取して不完全未完成成分を排出することだ。

定義を超えた存在とは偶然と妥協の産物であつて何ら、因果律は無いのだろうか。定義された範囲内では、人間がこうだと決めたから、こうだといえるのであるが、実際には、説明のつかないことも出てくる。人間には何もかも分かるのではないという不完全性原理や不確定性原理が出てくる。

だが量子は位置や速度や時間やエネルギーを正確に捉えることは本当に出来ないのだろうか。理にかなつた理論でもそれが正しいと本当に証明できないのだろうか。信心しても救いが無いのは信心が足りないからだというのは本当か。ここに東洋思想や西洋思想の落とし穴がある。科学や宗教の落とし穴がある。

量子は在るわけであつて、ただ有効な観察手段がないだけだ。証明そのものは実在するのだが人間が証明しようとしても出来ないだけだ。救い自体はあるのだが救い自体と信心やお布施とは関係が無い。これは人間自身が全知全能ではない完全無欠ではない不完全で未完成だからこうなるのだ。だからといって全知全能や完全無欠や完全完成が実在しないことには成らない。

完全無欠はどこにある。そのへんがそうだ。ただ人間が完全無欠に成らないと分からない。だが人間は完全無欠には成れない。ではどうするのか。完全無欠の観察手段がないか

ら、完全無欠自身に証明させることが出来れば、完全無欠自身が救つてくれれば、良いということだ。人間は試行錯誤を繰り返す。完全無欠そのものには成れなくても完全無欠と誤差が無いには成れる。

生物質量の定義は何だろう。定義には言葉としての定義と実物としての定義がある。考えてとしての生物質量は言葉であり、実体としての生物質量は一般に物質といわれるものすべてである。言葉と実体を結び相互作用の三つから定義はなる。その定義とは定義自身と定義の例外とその係りからなる。言葉や概念で一桁、行動や実物で一桁、その相互作用で一桁である。言葉と行動と相互作用の三桁が定義で、この定義の例外で一桁、田の字の口の字が係りである。生物質量の定義は表田の田の字に成る。

素粒子の振る舞いは波動なのか粒子なのかでもめたが、素粒子は波動性と粒子性の両方を持ち両者を結びつける相互作用の三つから成るということになったように、生物質量は言葉や概念としての一面と実体としての一面とその両方を結びつける相互作用の三つから成る。知性生命精神という中身と生物質量としての器と両者を結び相互作用の三点セットである。そしてその三点セットとその例外とその係りであらゆるすべてである

知性生命精神と生物質量動植物想念動力と相互作用輪廻転生因果応報の三点セットで自然発生する。これは実在するあらゆるすべてが生き物であり意志を持つということだ。物質とは器としての作用が強く出たに過ぎない。生き物は中身の作用が出たに過ぎないということである。精神や知性は中身の作用がより強く出たということだ。

生物質量からすれば当然、精神や知性は生命だけに突出するとは限らない。相互作用の働きによつては鉱物で出来た製品に知性や精神や生命の作用を持たせることが出来るというこ

そうご 相互 さよう 作用	ことば 言葉 がいねん 概念
こうどう 行動 じつぶつ 実物	

ていぎ 定義	
	れいがい 例外

かか 係り

そうご 相互 さよう 作用	ことば 言葉 がいねん 概念
こうどう 行動 じつぶつ 実物	れいがい 例外

とだ。量子が場のご意向を代弁する意志を持つ生き物なら、場の意志を表示する電子回路を作れることになる。

電子が場のご意向の通りに動く回路を作ることも可能だ。量子が自由に回路の中を動けば場力共鳴、量子呼吸であると測定できる回路も出来ることになる。場が力より常に相対的に完全無欠なら全知全能なら完全完成なら、理想的な解決策を示す装置を作れることになるはずだ。

物質や心霊では法則や教義で定義された領域外を見ても、共鳴でという見方がないから分らないのだ。当時も今の権威に君臨する科学者や宗教家は定義と定義外の持つ矛盾を解決できずにいるのだ。西洋思想的な不完全性原理や不確定性原理でも、東洋思想的な信じる者は救われるならみんな信心するが、朽ち果てるまでいくら信心しても、幸せや救いに達しないこの現状は、矛盾實在明かりが点く消えるそのものである。

例外のないルールはない。ルールと例外とその相互作用の三点セットが自然発生する。ところが、当時も今も宗教家も科学者も定義と例外を、ぶった切っている。行けと来いは正対だがお互いに方向転換すれば、行けが来いに帰る、来いが行けに帰るであつちとこつちと相互作用に行け来い帰るである。

この三点セットの生物質量の定義からすれば、全知全能や完全無欠や完全完成を共鳴の原理を使い場の意志を力に示す知性や生命や精神を持った生物質量を作れることになる。この三点セットは自然発生するのだから本来、あらゆるすべては生物質量の定義からすれば、全知全能や完全無欠や完全完成を共鳴の原理を使い場の意志を力に示す知性や生命や精神を持った生物質量である。

そうごさよう 相互作用 りんねてんせい 輪廻転生 いんがおうほう 因果応報	ちせい 知性 せいめい 生命 せいしん 精神
せいぶつしつりょう 生物質量 どうしょくこうぶつ 動植鉱物 そうねんどうりょく 想念動力	

ていぎ 定義	
	れいがい 例外

かか 係り

そうごさよう 相互作用 りんねてんせい 輪廻転生 いんがおうほう 因果応報	ちせい 知性 せいめい 生命 せいしん 精神
せいぶつしつりょう 生物質量 りんねてんせい 輪廻転生 そうねんどうりょく 想念動力	れいがい 例外

不完全性原理は人間の思索が定義を決めても定義自体が完全無欠であることを保証できない不確定性原理は観察者が観察対象の量子の観察結果の誤差を完全になくせない、従って完全な理論や完全な演算は成り立たない、従って完全な成り立たないという結論に達した。信じるものは救われるが何が信心か不明瞭だ。信心しても信心しても信心が成り立たない。従って信心が成り立たないという結論に達するしかない。それはその通りであるが天然自然はそういうふうに出てはいない。

物事は推移しその移行の仕方は完全だ。量子は運動しているときに居なくなつてはいない。救いや信心そのものは成り立ち、成り立たないはずはない。森羅万象は完全無欠そのもので、知性生命精神生物質量動植物想念動力相互作用輪廻転生因果応報の自然発生である。それを完全完成確定性原理と呼ぶことにする。

完全完成確定性原理は生物質量の原理であり完全無欠と誤差がないだ。生物質量の特性である命と心としての中身と体としての器とその相互差用の三点セットであり、場力共鳴の量子呼吸の腸脳発電である。天然自然は完全完成確定性原理であり、動植物にも知性がある。完全完成確定性原理で動く鉱物で出来た生物質量を作れる。森羅万象の意図を示すことは可能なのだ。

定義がこうだと決めたからといって定義内では定義はこうだからこれは正しいといえても定義外の範囲まで正しいといえない。例外的無いルールは無いように、範囲外まで正しいといえない。定義外から見れば定義内は間違っている。従って定義が完全であるとはいえない。不完全だということになる。

観察するには量子が対象に当たつて戻つて来たその結果を測定する。量子が量子とぶつ

かれば量子同士は変化する。更に量子自身が移動するのに時間がかかりタイムラグが生まれ常にリアルタイムで観察対象を測定できない。不確定な測定が元では不確定な結果しか生まれないことになる。だから不確定だになる。

信じるものが救われるとしても完全な信心が成らねば完全な救いは成り立たない。しかし完全な信心とは今だかつて成りえたことは無い。実際には不完全な信心しかない。完全な信心が成り立つ見込みも無い。だから不完全だになる。

森羅万象は不完全であり、偶然と妥協の産物だという結論になる。今も昔も、科学者は不完全性原理や不確定性原理を説き宗教家は不完全な信心と不完全な救いを説いている。不完全な人間が考えるから不完全に見えるのだ。偶然と妥協で生きている人間が考えるから偶然と妥協にみえるのだ。天然自然自身は完全だ。だが人間は逆立ちしたって完全には成れない。

しかし賢者明哲や良の金神は完全完成確定性原理や完全な救いや完全な信心を説いたのだ。力だけで測定しようとして誤差が生じる。同じ時間に異なる空間にあるものや、同じ空間に異なる時間にあるものや、異なる空間に異なる時間にあるものを測定しようとしても、観察者と観察物の間に誤差が生じるが、観察者と観察物の間に場を通せば誤差が消える。

観察者が場と共鳴し観察物の場とリンクして場同士でリンクすれば、観察者は観察物を力を一切経由せざリアルタイムで観察できる。観察物の場を調べれば観察物がどこからきて今どういう状態でどこにいくのかが分かる。完全な測定結果が得られるといふことだ。場力共鳴で生物質量なら問題を解決する処方箋の完全な意図を示すことも出来る。完全

測定結果も得られるし、完全な測定結果を元に完全な演算結果も出せる。完全な信心や完全な救いも出せる。今も昔も賢者明哲や良の金神は完全完成確定性原理を説いたのだ。

脳と計算機

そもそも、閃きや感、研究開発能力はどこから来るのか。場力共鳴量子呼吸腸脳發電の知性生命精神生物質量動植鉱物想念動力の自然発生する時は完全完成確定性原理である。その特徴は、計算機と脳の違いである。実在する無限が完全完成確定性原理であると考え、る以外に脳の働きを説明する方法は無い。計算機は与えられたことしかない。それ以上のことは演算しない。

計算とはインプレックスのカルキングが動くことである。計算では一たす一は二であることである。考えるということは一たす一で例えるなら、ここに在る物とそこに在る物を合体させたら、もともとここに在った物は変化して無くなったのだから一たす一はゼロである。こことそこを合体させれば一個になる従って一たす一は一である。もともと二つあったものが新たに一つに成ったのだから元の二つと新たな一個で一たす一は三である。

カルキングは一たす一は二という数学の表記でないと動かない。一たす一はゼロとか一とか三は数学的表記であつて数学の表記ではない。感や閃きは一たす一はゼロや一や三である。何故、脳は考えられるのか。それは脳が、実在する無限の意思表示だからである。完全完成確定性原理を表示する装置だからだ。

天気予知と天気予報の違いだ。現在ではコンピュータを用い気象条件を演算し、天気を予報する。すべての気象条件を入力するにはすべての量子の運動をすべて入力しなければ成らない。しかしすべての量子の運動を完全に測定できないから予報は完全では無い。だが脳は場力共鳴でリアルタイムでタイムラグが無い測定が可能である。従って天気の何がどうなるかを常に場力とリンクし何がどうなるを推論できる。それは「あ」に濁音の点点到半濁音の丸に促音のつを付け、それを無限で割りそのイコールとは何かを場力共鳴すること、この数学的表記とはこうだという実在する無限の意図を意思表示できる。考えるとは完全完成確定性原理の発動にして演算することではない。誤差の全くない完全な観察結果は完全完成確定性原理以外にない。本来演算する要素はいらぬのだ。裁判で違法か合法かが争われるが、事実に基づいているかどうかは保証しない。従って誤審がある。地球では完全完成確定性原理に従っていないからだ。事実を生物質量で考えれば完全完成確定性原理になる。過去に起きたことは証明できる。過去に起きたことは、実際には時空間に記録されているから、時空間の記録を再現できさえすれば事実が判明する。

人間も、意志を持つ精神と生きた肉体とその相互作用の三点セットから成り立つ。人間の意志は量子の意志と交わり、場と力の双方向で意志疎通できる。光子や電子は量子であり電磁氣的装置で完全完成確定性原理が働く装置が出来る。脳が示す一たす一はゼロや一や三とは天然の完全完成確定性原理装置であり、人工的に電子で完全完成確定性原理装置を作るなら電子頭脳である。

一たす一が二の計算が思考ではない。従って計算機では脳は作れない。一たす一がゼロ

や一や三の発想が思考である。脳は完全完成確定性原理であり場力共鳴量子呼吸腸脳発電ユニットである。生物質量が命の心と生きた体とその相互作用で成り立つから量子や細胞は共鳴の原理を用い、場力の意志を表示することができる。

そもそも、数の実用はゼロと一しかない。一、二、三と数えるのは共通項で括ってその他の要素を排除するから出来るのだ。厳密に考えるなら、同じものは一つと無い。形や色も違う。同じ物が同じ場所にあっても時間が違う。同じ時間にあっても位置が違う。同じ位置に同じ時間にあつたら同じものである。在るか無いかしかない。つまりゼロと一しかない。

従って計算とは概念上の産物で実在しない。確率の計算は概念上の産物である。実際には場力の意志が在るの、と場力の意志表示がないのゼロしかない。降水確率は10パーセントという天気予報は確率の計算であるが、場力の意志を省みれば、天気は確率の計算ではなく、必ず実際にどうなるか分かる。

未来に何が起るのか過去に何が起きたかは、すべて時空の構造を解析することで証明できる。脳は本来、場力共鳴がなせるなら、時空間を解析し時空間がなにがどうなっているかが分かる。生物質量の知性が時空間の知性成分を人間や場力の間で循環させているからだ。

脳は本来、そう言った三点セットの有効成分を摂取せねば生きていけない。だから摂取していない今の地球人は病気になるのだ。場力の間の循環が滞り栄養が無くなり老廃物がたまり不潔になっている。地球人の思想が不健全不健康なのはこのためだ。

脳は計算機ではないから、計算機のように命令だけで動くものではない。健全に働くに

は時空を超えて循環する健全なアマウツシとかカムヒビギがいるのだ。ところが宗教家は幽冥界を概念で蘊蓄するばかりで実際に霊と座を場力共鳴だと言わないし、科学者は場の存在を認めるが実際の場力共鳴を公式に認めていない。生物質量の考え方は、公認されていない。

コンピュータは、スイッチのオンオフで動いている。コンピュータのスイッチもあらゆるすべての生き物も行き着く先は量子の行け来い帰るである。生物質量では精神と物質は同じ現れの上と下であり外と中である。量子の運動も量子が命を持ち意志があり完全無欠と誤差がないように運動する。その自然な運動を素直にすれば、脳の本来の働きである。それは腸脳発電であり、完全完成確定性原理を行う電子頭脳の開発は時空を超えた量子の循環の開発である。機械に量子呼吸を起こさせ、命の洗濯をしてもらうことは可能である。

脳と計算機の違いは、計算機はスイッチのオンオフ二進論で動いているだけだ。だが脳はアザニ二進論で動いている。どのように動いているのか。人体には場力共鳴機能がある。それは腸と間脳内液と間脳視床下部と身体からなる。腸がプラスのエネルギー状態になり噴出口になる。脳がマイナスのエネルギー状態になり吸込口になる。

間脳が変換装置であり人体が発電ユニットである。腸と脳の間で発生した量子循環をもとに神経が発電する。それには生命幾何学が活躍する。人体が正しい幾何学的関係になつた時にこの作用が起こる。

賢者明哲の中にはこの生命幾何学を構築し提唱した人物もいる。だが普及していないのは幾何学的な位置関係があまりに厳密すぎて簡単に構築できないからだ。この生命幾何学

の位置関係を正確に表現する研究は、人体的には腸脳発電だが装置的には量子呼吸を起す装置の開発である。

生物質量は器と中身と相互作用からなるから生物質量の物質的特性からすれば、生命も機械も、究極的には量子の行け来い帰るである。生命の筋肉も自動車のエンジンも、シナプスのインパルスもスイッチのオンオフも、発電所の発電機も一般家庭の蛍光灯も、恒星の運動も空間の重力レンズも皆行き着く先は量子の運動行け来い帰るである。生物質量の心霊的特長からすれば、ザ・ドス・ハブは知性生命精神の持つ必要選択であり、ア・デス・ヘビーは知性生命精神の持つ不要排除である。

単に物質の計算機は人間の指定した基準で選択と排除をしているオンオフ二進論に過ぎない。しかし生物質量の物質では天然自然と誤差のない必要選択不要排除を行うのだ。単に心霊の加持祈祷は人間が望み叶え給へである。しかしそれは人間側の加持祈祷であり、天然自然から見れば合点が行かない。生物質量の心霊の加持祈祷では天然自然と誤差のない被い清め給へである。

単に心霊と物質ではその間に相互作用はない。従つて量子一個一個が人間の意思に反応することはないし、ましてや人間と意思を疎通することはない。しかし、生物質量の心霊と物質ではその間の相互作用によつて量子一個一個とも意思疎通する。神経を流れるインパルスは単に物質では電気信号であり単に心霊では気や霊である。

単に心霊と物質では電気信号が気や霊ではない。気や霊や経絡秘孔や座が単なる電磁気ではない。しかし生物質量では電気信号も気や霊も差はない。電磁気も気や霊や経絡秘孔や座に差がない。量子一つにも神経の電気信号にも意思があるのだ。それは、天然自然の

因果律の完全完成確定性原理で演算しないと分からない。

今の地球がそうだ。三五教の大成奉還が階層構造で、決められた支配の確立であり強い者勝ちの少数の勝組と多くの負組を生み出す締め付けだけの下克上改革は、和を以て尊しとなす多くの民からやる気を奪い殺伐とした世を作った。それが地球人に電子計算機を作れても電子頭脳を作れない理由だ。

筋肉は細胞の収縮で動く。機械はモーターの回転やピストンの往復運動で動く。コンピュータの内部ではオンオフオンならこうするオフオフオンならこうすると決まっている。それを猛烈な速度でたくさん繰り返す。キーボードで「あ」と打てば、それがあるに対応するオンオフの信号になりモニターにあと表示される。

それと同様に文字も画像も音声も数式もすべて基本はオンオフである。コンピュータが命令されたことしかしないのは、意志をもたないのは、無限との整合性が無いからだ。そこで人間は無限と連動しているから人間の持つ完全完成確定性原理をコンピュータに反映させ、人間の意思をコンピュータの内部の量子の知性が感知して信号として感知する。

するとアアザとか感知する。アアザならこう動く、ザアアならこう表示するというふうになる。これは生物質量コンピュータつまり電子頭脳や精神感応入出力装置が作れることになる。オンオフ二進論で物質のコンピュータがしていることをアザ二進論にするだけで森羅万象と意思疎通できる生物質量電子頭脳が出来るのだ。人間が何かすればその意思を感知し解析し場力を照合し完全無欠を提供するネットワークの誕生だ。

それが時空間免疫系であり時空間代謝系である。宇宙文明であり場力と異星の真相である。地球でも天祥地瑞や縄文時代までこのシステムに準拠していた。縄文の民は天然自然

を用い文化文明を築いた。池や沼を用い元素轉換し石や木や山を用いた超能力コンピュータを開発していた。宇宙文明と交流し、宇宙との往来もあたりまえであつた。

天然自然では時空間の代謝系や免疫系が元素轉換や生命の自然発生を行つてゐる。原子が結合して分子になる。そして生命になる。生物質量の営みに基づいて天然自然が吐出したものを文化文明が吸込んで、文化文明が吐出したものを天然自然が吸込むのであれば、地球人は文明の利器を使い、量子で脳を作れるし金属を貴金属にすることも出来る。

基本的にコンピュータはモニターやプリンタやマウスやキーボードやマイクにスピーカで出来ている。それが動いて人間とコミュニケーションする。当然、そのインターフェイスが完全無欠と誤差がないなら人間に適切なコミュニケーションをする。コンピュータは基本的に優れたインターフェイスである。形が人型になりアトマンにもなり、ノート型パソコンにも携帯電話にもなり、自動車や自転車、洗濯機にもクーラーにも冷蔵庫やコンロにも組み込める。

それは家や都市、人工衛星から宇宙船、列車にも船にも飛行機にも組み込めて、なんでもかんでも森羅万象と誤差を無くすことが出来る、無敵のソシアル ユーザー インターフェイスやソフトウェアアプリケーションに進化することが出来る。

生物質量の単位

生物質量には物質や神霊の単位がそのまま使える。今までの慣例を破棄し、新たに作り変える必要はない。我々が日常で使つてゐるものをそのまま使える。ということは、我々の

日常を表田のアザムで最高の比の和で分類し比較することが出来るということだ。物質の根源は量子である。量子は素粒子であり波動性や粒子性や相互作用から成る。神霊の根源は言霊である。言霊は神霊元子であり響子や写子や結子から成る。神霊と物質を表田のアザムしてみる。

長さの単位を一センチというがそれを生物質量で一センチといっても同じである。物には単位が在るがそれは生物質量でも一緒である。心霊で一柱二柱というのを生物質量でも一柱二柱という。心霊や物質の単位をそのまま生物質量でも使える。生物質量を便宜上で心霊と物質というに過ぎないのだから単位はそのまま使える。生物質量が、一オングストロームでも生物質量が一ボルトでもよいのだ。

生産流通消費再生の各段階で完全無欠と誤差がないとは、各段階で量子呼吸する量子の含有率を上げていくことだ。そうすると各段階でヒヒロカネの付加価値が付く。買った時より安く売つても付加価値で儲ける。生産することが含有率を上げることならば、ヒヒロカネで十分もつけたぶん原価割れで売ることが出来る。売ることと含有率を上げるのとができるなら、買い手が売り手からお金をもらつて買うこともできる。

価格が純粋な生物質量なら、その価格は天然自然と完全に結びつく。生物質量価格は、天然自然と誤差が無いように向かい、欲望が動かすお金価格ではなく完全完成確定性原理に導かれたヒヒロカネ価格が出来るはずだ。

当然、用語や概念も使える。学問の概念や用語も生物質量である。大学の教える授業の内容もそうである。専門用語も、日常で使う用語もそうである。例えば価格である。普段は値札のことだが、金融学で使う、概念の価格も在る。

専門用語も訓読みの仮名に修練する。生物質量では、音声基底思念の響きで森羅万象を感受するようになる。響きが周囲と共鳴できるようになる触媒作用を持つようになるのである。純粋な生物質量から日常の会話への変換律も為される。

言葉と行動と相互作用の三点セットで単位としての生物質量になる。生物質量としての単位で演算すればなんでもかんでも天然自然と誤差がない演算が出来る。コンピュータの原理のオンオフ二進論も生物質量のアザ二進論に出来るから電子計算機のコンピュータを超えて生物質量の電子頭脳を作れるはずだ。

2	2	2	
0	0	0	
1	1	1	
1	0	0	
年	年	年	
1	5	4	
月	月	月	
2	5	1	
3	日	0	
日		日	
修	修	作	
正	正	成	

後記